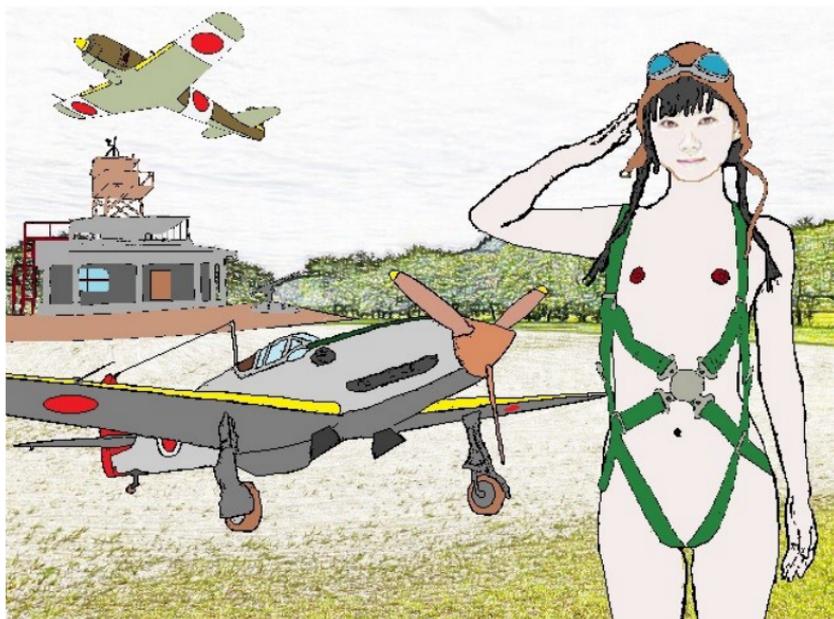


ヒロイン戦記シリーズ 2

成層圏の飛燕  
～海女翔けるとき



濠門長恭

## 目次

1. 空中衝突 .....	- 3 -
2. 公然制裁 .....	- 16 -
3. 敵前逃亡 .....	- 48 -
4. 前縁改造 .....	- 74 -
5. 新型爆弾 .....	- 85 -
6. 処女登楼 .....	- 111 -
7. 慕情昇天 .....	- 145 -
8. 天女特攻 .....	- 159 -
参考文献 .....	- 173 -
後書き .....	- 174 -

目次単位で「しおり」を入れてあります。

P D F 閲覧の際にご利用ください。

後半のHシーンを白抜きにしてありますが、  
ストーリーは最後までお読みいただけます。

## 1. 空中衝突

断雲をはるか眼下に見て、四発重爆が悠然と飛んでいる。その左後方を三百メートルの高度差で追尾する六機の三式戦（飛燕）。さらに上空には単機の四式戦（疾風）。

ザザッ……

耳元で受話器が鳴る。

『柴田中尉、攻撃かかれ！』

先頭を飛んでいた飛燕が銀翼をひるがえして緩旋回にはいった。浅い角度で突っ込みながら、重爆の未来位置に向かってじわっとひねり込んでいく。

上空に占位している他機からは、飛燕と重爆の大きさの違いがいやになるほどはっきりとわかる。手前の飛燕が重爆より小さく見えるのだ。古参の戦闘機乗りといえども、これでは距離感を誤る。

重爆の水平尾翼に飛燕の主翼が重なった。

飛燕の機首から一条の白煙が断続的に伸びて、重爆の水平尾翼の付け根に緑色の弾着痕が散った。直後、飛燕は重爆の下を斜めにすり抜けた。

『撃墜確実、さすがだな』

一番機がじゅうぶんに離れたところで。

『能崎中尉、攻撃かかれ！』

教導区隊の二番機が同じように突っ込んで、急激な引き起こしで重爆をかわした。垂直尾翼の中ほどに数発の赤い弾着痕が残った。

『撃墜確実だが、二期生は真似しちゃいかんぞ。突っ込みで避退しろ』

上昇でかわせば第二撃を早くかけられるが、速度が落ちるので、護衛戦闘機がいれば食われる危険があった。

『田中少尉、攻撃かかれ！』

訓練小隊の一番機が機首をひねった。重爆の尾翼に向かって突進。相手の現在位置にっこうとしているので、だんだん真後ろにはいっていく。五百メートル以上の遠距離から射

撃を開始して、命中弾無し。

『後方へつくな。旋回銃を固定銃にさせるな』

真後ろについての戦闘機は、爆撃機から見て動かないのも同然になる。

『堀木少尉、攻撃かかれ！』

二番機が攻撃態勢にはいった。しかし、未来位置を読み間違えている。このままでは重爆の前方を横切ってしまう。本人も気づいたのだろう。右傾斜を深くして突っかける。

『やめ！ 左にかわせ！』

下村少佐の緊迫した声。

二番機は左に切り返して機首を下げた。

『失敗したと感じたら、まず離脱せよ。あのまま攻撃していれば、ぶつかっていたぞ』

数秒の空白。

ザザッ……搬送波が聞こえた。

『池澄少尉、攻撃かかれ！』

三番機の池澄少尉は、思いきり腰と首をひねって全周を見回した。すぐ後ろに四番機、右上空には尾部を赤く塗った下村少佐の四式

戦（疾風）が見える。教導区隊の二機は後方で上昇中。我を攻撃可能な敵機無し——訓練だから当然なのだけど。

池澄少尉は右六十度に傾斜をとって方向舵で機首を下げ、すぐに傾斜を浅くした。小刻みに補助翼と方向舵を使って重爆の未来位置へ回り込みながら、過速にならないようガスレバーを絞る。光像照準器に重爆の水平尾翼をとらえたところで舵を中立にする。

タン、タン、タン……

二十ミリ機関砲と同じ発射速度に調整された七・七ミリ機関銃から、頼りなげな白煙が伸びて——左上へ流れた。

（……！）

じわっと右を踏んで、操縦桿をわずかに突いた。パッと青い染料が重爆の胴体に散った。そのとき。

『突け！ 左！』

はっと気づくと、風防いっぱい重爆がかぶさっていた。尾翼に貼られた弾着判定用の

合板の継ぎ目までくっきり見える。

「わああっ……！」

ペダルを踏み替えて操縦桿を左いっぱい  
倒しながら突っ張る。

間に合わなかった。重爆がゆっくりと右へ  
傾きながらのしかかってきて……

ガッ！！

耳が音として認識できないほどの衝撃。胸  
と腰に、ガクンと安全帯が食い込む。地面が  
くるくる回りながら頭上へ流れていく。乗機  
の姿勢を安定させようと必死に操縦しながら、  
ふと右を見ると、そこにあるはずの主翼がな  
かった。

とっさに脱出を決心した。有機ガラスが砕  
け散って枠だけになった風防が、固くて動か  
ない。安全帯をはずしてから、両手で揺すぶ  
ってわずかにできた隙間に肩をこじ入れて、  
計器板を両足で踏ん張る。枠が後ろへずれて、  
風圧で身体が吹き飛ばされた。

不規則に回転しながら離れていく飛燕の残

骸。

グウンと身体を引っ張られて、落下傘が開いたのだと知った。

(助かった……)

自分の生き死になどまるで考えていなかったのに。ほっとしてしまう。と同時に。

(重爆は……搭乗員は?)

顔を上げて機影をさがす。

——いた。尾部をもぎ取られた四発重爆は、機首を下げ気味にして緩慢な水平錐揉みにおちいていた。ひとりふたりと飛び出して、白い大きな花が空中に咲いていく。尾部には誰も乗っていないはずだし、あのゆっくりした落ち方なら脱出が間に合わないなんてこともなさそうだ。

(味方を殺さずにすんだ)

ほっとしたのは一瞬だけ。激しい後悔と自己嫌悪とが胸を焦がす。たった一機しかない大型機を壊してしまった。これからの訓練は、どうなるのだろう。訓練の不足で敵機を取り

逃がしたら、爆弾を落とされたら、それだけ多くの国民が殺される。自分の一瞬の不注意が防空網に大穴を開けてしまった。

(脱出しなければよかった)

そこまで思いつめてしまう。それなのに、生還の大地は目前に迫っている。

脚に衝撃を感じた瞬間、動物の本能で身体を丸めて転がった。訓練のとおり落下傘の縛帯をはずして、どこも骨折していないことをたしかめてから立ち上がった。

ブロロロロ……

疾風が五十メートルあたりまで降りてきて、頭上で旋回している。手を振って無事を伝える気にもなれず、悄然と畑の中に立ち尽くす池澄少尉。

やがて、疾風は主翼を小刻みに振りながら飛び去った。それを追うように、二十人以上の村人たちが駆け寄ってくる。近くに小学校でもあるのだろう。半数以上は子供だった。

「兵隊さん、怪我はないですか？」

「ずっと見てたよ。すごかった！」

「体当たりでやっつけたんだね！」

「アメ公め、度肝を抜かれたろうて」

「バンザイ、バンザイ、バンザイ！」

小柄な戦闘機搭乗員を囲んで、興奮しきった声をかける村人たち。

「待ってください」

甲高い声で池澄少尉がさえぎった。

「違うんです。訓練だったんです」

池澄少尉はマフラーをはずし、飛行帽と飛行眼鏡をむしり取った。ほっそりした首筋と、その上にちょこんと乗った、卵形の顔。そして、頭の後ろで丸められた三つ編み。

「ええーっ？ おなごかい？」

「まだ娘っ子じゃねえか」

戸惑いのざわめきが広がる。

「ぼく、知ってるよ！」

十歳くらいの男の子が得意そうに声を張り上げた。

「羽衣部隊の天女さんでしょ。B29をバツ

タバッタと墜とすんだよね」

「そうだ。あれ、飛燕だった。間違いないよ。ね？」

「おお、そう言えば……」

おとなたちもうなずきあった。

戦意高揚のため、飛行師団直属の第〇七五独立飛行中隊（通称＝羽衣部隊）は、何度も新聞にとりあげられていた。

成人男子よりも体重が軽く、常人よりはるかに酸素欠乏に強く、日常的な海中作業で鍛えられた空間把握能力を持つ女性——海女の中から選抜された、高々度重爆撃機専門の戦闘機部隊。昭和十九年六月創設。池澄沙智少尉は、その二期生なのだった。高度の空戦技能を必要とする対戦闘機格闘戦は避けて、超空の要塞のアキレス腱ともいふべき尾翼に一撃離脱をかける。極端に目標を絞りこんだ訓練は、入隊後半年に満たない二期生を戦力として期待できるところまで鍛えあげていた。それも、B 2 9に匹敵する大きさの深山があ

ってこそ可能だったのだ。

と——そういった軍機にかかわる事柄は省いて。体当たりした四発重爆は味方機なのだというのを、池澄少尉は村人たちに説明した。

「えれえこったいね」

国民服にネクタイを締めた老人が、山に目をやった。重爆の搭乗員が落下した方角だった。

「ほいじゃ、あっちも味方かい。誰か知らせに走ってくんない」

敵兵を捕まえようとして、巡査と青年団が山狩りに出たという。

「山田んちの次郎と田辺と、何人か猟銃を持つとる。間違いが起きなゆうちに、はいく教えちゃれ」

十五、六歳の少年と五十絡みの農夫が、山に向かって駆け出した。

「学校の自転車を使ってくださいーい！」

若い女先生がふたりの背中に向かって叫ん

だ。

池澄少尉は村役場で電話を借りて、基地へ報告を入れた。自動車を差し向けるので、可及的すみやかに帰隊せよという素っ気ない命令が帰ってきた。空中衝突についてはひと言も叱責されなかった。それが不気味だった。

空中戦の話をしてくださいとせがむ子供たちは、落ち込んだ様子を気づかった女先生が締め出してきて。池澄少尉は村役場の応接室で、ひとり針の筵に座っていた。食糧の欠乏した昨今では貴重品というべき羊羹にも、手を出す気にはなれなかった。井戸で冷やされた麦茶も、生水ほどの味すらしなかった。

そうして一時間もした頃。国民服にネクタイ姿の村長が、遠慮がちに顔を出した。

「みな、帰って来よりました。爆撃機の兵隊さんも、たいした怪我はしとらんそうです」

池澄少尉は足早に役場の外へ出た。山へ通じる道の遠くに、それらしい一団を認めると、

そちらへ向かって駆け出した。

「ごめんなさい！」

息を切らせながら駆け寄って、搭乗員たちに向かって深々と頭を下げた。

「謝ってもらっても、どうにもならねえよ。海軍さんから無理くり貸してもらった深山だぞ。それを壊して……」

やめておけといった感じで、隣の兵が激昂している兵の脇をつついた。

「もう、いいですよ」

機長らしい年配の下士官がとりなした。

「少尉殿もお怪我がなくて、なによりでした。こっちも脚をくじいたのが一名だけで、あとは引っかけ傷くらいのもんです。気にしないでください」

十幾つも歳の離れている少女への口の利き方ではなかった。下士官は曹長の肩章をつけている。下士官の最上級者だ。しかし、下士官と将校との間には厳然とした身分の壁がある。わずか十八歳の、士官学校に足を踏み入

れたこともない小娘に少尉の階級が与えられたのは、男女間の醜聞（ことに、男性側の暴力によるそれ）を未然に防止するための苦肉の策だったとはいえ、階級は階級なのだった。

池澄少尉はもう一度最敬礼をしてから、一団の最後尾について歩き始めた。

脱出しなければよかったと、また思った。

自分には脱出する義務があったのだ——と、頭ではわかっている。これまでの訓練は、飛行時間だけで二百三十時間。血の一滴とまでいわれるガソリンを大量に使い、教官や多くの整備兵の手をわずらわせている。なんの戦果もあげずに、それらを無に帰してよいはずがない。

そうはわかっている。防空の要となる戦闘機を壊し、日本に何機もない大型機を喪失して部隊の訓練計画を台無しにした責任は、思春期を抜けきらない少女が背負うには重すぎるのだった。

## 2. 公然制裁

昼過ぎに迎えの自動車が到着した。池澄少尉は乗用車で、重爆の搭乗員は貨物自動車に分乗して、それぞれの基地へ向かった。池澄少尉が部隊へ戻ったのは夕刻になってからだった。

「池澄少尉、ただいま帰着いたしました」

指揮所の櫓の下へ行って、中隊長に申告した。

六尺（百八十センチ）ちかい体躯の中隊長は、腕組みをして池澄少尉を見おろしている。丸坊主に刈った四角い顔はなんの表情も浮かべていないが、太い眉毛のあたりにピリピリした殺気が感じられた。

「報告いたします。本日の接敵射撃訓練において、自分は<sup>ヒトマルヒトゴ</sup>一〇一五、標的機の左後方より……」

中隊長は組んでいた腕をほどくと、拳を握

って水平に振るった。

ガシッ！

目の前で閃光が炸裂して、耳がキインと鳴った。池澄少尉はよろけて、それでも脚を踏ん張った。頬骨に激しい痛みが残った。

「報告はいらん。最初から最後まで俺が見届けておる」

四式戦で空戦指導をしていたのは、この下村万蔵少佐だった。

「貴様は教えられたことを何ひとつ守っておらん。どこが悪かったか言ってみろ」

自分で間違いに気づかせる教え方は、いつもと同じだった。しかし、問答無用で部下を殴りつけるような人物ではなかった。池澄少尉は戸惑いながら、教官の質問に答えた。

「……射撃の前に旋回滑り計を見ませんでした。横滑りに気づかず射撃したので、弾が流れました」

教官の腕が、また上がった。池澄少尉は逃げようとはせず、歯を食いしばった。

ガシンッ！

「……弾着修正に気をとられて、彼我の距離への注意を怠りました」

「その結果は、どうなった？」

「空中衝突して、飛燕と深山を壊してしまいました！」

池澄少尉は叫ぶように答えた。教官が腕を組みなおして、じっと少尉を睨みつける。鉄拳にも毅然と耐えた池澄少尉の膝が砕けて、その場に土下座してしまった。

日本の軍隊、ことに陸軍では官給品の紛失や破損を絶対に許さない。川に落とした銃剣を分隊全員で真冬の川に腰まで浸かって何時間も探した例とか、歩兵銃の銃口覆いを紛失しただけで苛酷な制裁を受けて自殺した初年兵とか、枚挙にいとまがない。最初から将校として扱われている羽衣部隊の搭乗員たちは、そこまで厳しい制裁を受けたことはないが、ビンタのひとつやふたつは誰もが経験していた。だから、池澄少尉の反応は当然でもあつ

た。

「ごめ……申し訳ありません」

「謝って済む問題ではないっ！」

そんなことは、言われなくてもわかっていた。あの飛燕で撃墜されていたかもしれないB29が生き延びて、その爆弾で殺される国民は、自分が殺したも同じなのだ。

「立て」

池澄少尉は素直に立ち上がって直立不動の姿勢をとった。どんな処罰にも甘んじる覚悟だった。しかし、下村少佐のつぎの命令は予想外のものだった。

「服を脱げ」

軍服を剥ぎとって、陸軍から追放するということだろうか？ 池澄少尉は少佐の顔色をうかがったが、その無表情からはなにも読み取れなかった。

池澄少尉は長靴ちようかを脱ぎ、腰帯をはずして、ツナギになっている飛行服から身体を抜いた。さすがに、いつものキビキビした動作ではな

かった。

「襦袢も脱げ」

(……………！?)

ようやく、池澄少尉の顔にためらいと戸惑いが浮かんだ。それでも、上官の命令には絶対服従しなければならないという教育が彼女を支配していた。

襦袢を脱ぐと、あとは下帯だけだった。軍隊で標準の越中褌ではない。細長い布の端を絞って紐に縫いつけて股間に通し、腰に回して前で結んだ紐に布の端を巻き込んだだけの、海女特有の女褌だった。きわどい部分がやっと隠れるだけで、尻は丸出しになる。

ほとんど全裸の姿で、池澄沙智少尉は直立不動の姿勢にもどった。十四歳で初潮を迎えたときから海に潜ってきた彼女の身体は、同じ年頃の娘とは比べものにならないほど引き締まっていた。そして、冷たい海水に体温を奪われないようにふっくらと乗った脂肪は、半年の厳しい訓練でも削ぎ落とされていなか

った。おのれの腕の中で存分に跳ね躍らせてみたいと、男なら誰もが思うような裸身だった。

「四つん這いになれ」

ふたたび、信じがたい屈辱的な命令。

従兵が中隊長に木刀を手渡すのを見て、沙智は命令の意図を理解した。むしろホッとした思いで、四つん這いになって尻を突き出した。

「貴様の勝手な行動で、貴重な飛行機を喪失した。反省しろ！」

バシッ！

木刀が生尻に叩きつけられた。ミシッと骨盤が軋む音を、沙智は体軀に感じた。

「あ、ぐっ……！」

悲鳴は呑みこんだ。

「貴重な飛行機を壊して申し訳ありませんッ！」

叫ぶことで痛みをこらえた。

バシッ！

半年のうちに日焼けの薄れた白い尻肉に刻まれた濃い桃色の線条に交差して、ふたたび木刀が打ち込まれる。

「飛行機を壊して申し訳ありませんッ！」

いつの間にか、ふたりのまわりに人垣ができていた。

バシ！　バシッ！

下村少佐は野次馬を追い払おうともせず、立て続けに木刀を振るう。すでに沙智の尻は真っ赤に染まっていた。

(いやだ……！)

ふっと顔を上げた沙智は、野次馬が男ばかりなのに気づいて羞恥の感情に身悶えた。浜辺では女禪だけで憩うこともあるし、ときには男衆と談笑することさえあった。けれど、それは――仲間が何人もいたし、男衆も似たような格好だからだ。軍服や作業衣をきちんと身に着けた男たちに囲まれて、自分ひとりが裸で、屈辱的な姿勢で制裁を受けているというのは、若い娘にとっては身を穢されるよ

りもつらいことだった。

このような私的制裁は、公式には禁止されている。銃口覆いを紛失した初年兵の例では、直接の加害者である上等兵は懲役刑に処されたし、分隊士は昇進が何年も遅れている。また、上級者が下級将校をあえて殴るときでも、下士官兵の面前ではけっして手を上げない。それをこのように、いわば見せしめのような制裁に及ぶとは、きわめて異常な行為だった。

バシン！

「飛行機を壊して申し訳ありませんッ！」

声を張り上げることで、沙智は羞恥心を打ち消そうとした。気丈にも、彼女の頬は乾いている。

バシッ！　バシッ！　バシン！

赤く腫れた尻に青痣が重なってどす黒く染まっても、木刀はさらに尻を打ち据える。

「飛行機を壊して……」

十何回目かの謝罪の言葉を喰れた喉から絞り出しながら、沙智は気をうしなった。最後

まで涙を見せなかった。

意識を取り戻したとき、目の前が真っ白だった。寝台にうつ伏せにされていると理解するまでに数秒かかった。

起き上がろうとした肩が、やさしく押えられた。

「動いちゃだちかんよ」

能崎和子中尉の声だった。肩を押えた手がすうっと滑って裸の背中をなで、さらに下へ向かう。尻を軽く圧迫されて、湿布を当てられていると知った。絶え間ない痛みの奥に冷感が沁みとおって、性的な快感にちかいものがあった。

「あ……」

声が漏れてしまった。

「下村さんも、おぞいわ」

標準語を使うようにと、学校でも軍隊でも厳しく仕込まれてきたが、気心の知れた同郷の者だけになると土地の言葉が出る。

「なんも、男衆おとこしの前でゲスひん剥いて、はわかんでも」

和子の掌が太腿へおりて、内側へ向かう。

「だちゃかん……やめさっし」

沙智は腰をよじって、先輩の手から逃れようとした。それでも和子の指は股間をとらえて、まだ男を受け入れたことのない蜜壺を穿とうとする。

「お姉さん、やめて」

沙智はきつい口調で拒んだ。こんなときに先輩と乳繰り合う気分にはなれなかった。

けれど和子は、いつになくしつこかった。彼女の手を払いのけようと後ろへまわした沙智の腕を逆につかんで、隊内で一二を争う豊満な乳房を沙智の腰に押しつけるようにして動きを封じ、右手の中指で沙智をいたぶる。

沙智の受けた屈辱的な制裁が、和子を刺激していたのかもしれない。自分もああいうふうにされたいと思ったのか、自分もああいうふうに沙智を虐めてみたいと思ったのか――

それはともかく。和子は力づくでも沙智を弄ぼうとしていた。

ほかの娘たちも、事情は同じようなものだったかもしれない。

「あああーっ、いい！　そこ……もっと突いてえ！」

末岡中尉だった。薄い合板で仕切られただけの隣室の声は筒抜けだ。

「中尉殿、自分はもう……」

「いやよ。ハナって呼んでえ……」

下士官兵に比べて格段に優遇されている将校は、隊舎でも個室を与えられるのが原則だったが、羽衣部隊では常住坐臥後輩を薫陶する意味で、一期生と二期生が相部屋になっていた。上層部の思惑が裏目に出て、性的な悪ふざけがだんだん本気になって、沙智と和子のように本格的なエスの関係になることも珍しくはなかった。

しかし末岡中尉は後輩の森田少尉には関心を示さず、もっぱら若年の二等兵を部屋に引

き入れていた。今ごろ森田少尉は厨房にしげこんで、好物の穴開き揚げ菓子でも作らせていることだろう——と、そんな雑念は一瞬のこと。

隣室の嬌声に気を奪われた和子を、沙智は思いきり突き飛ばしていた。

「ほんとうに、もう……今日は勘弁してください！」

和子はぽかんとした顔で沙智を見つめて、きまり悪そうに立ち上がった。

「……ごめんな。けど、思いつめんほうがいーよ」

能崎中尉は服装をなおして、部屋から出て行った。将校食堂から持ってきてくれたらしい池澄少尉の冷めた夕食が、小卓に乗っていた。

翌日から、池澄少尉は地上勤務を命じられた。階級章をはずして整備兵の手伝いをしろという、一種の懲罰だった。

初日は見学も同然だった。整備兵の側から見れば、彼女が空中勤務に復するときは少尉にもどるだろう。こき使うというわけにもいかなかった。それに。平常どおりにふるまおうとしている沙智だったが、木刀で打ち据えられた尻がひどく痛んだ。立っているのもつらく、かといって椅子に座るのは拷問にも等しい苦行だった。そばから見ていてもそれがわかるので、整備兵もきつい作業を手伝わせるのを控えた。

唯一与えられた仕事は、飛燕の冷却器にホースで水をかける作業だった。液冷だから、空冷発動機のようにプロペラ後流が気筒を冷やしてはくれない。地上で発動機の回転を上げるときは、冷却器を外から冷やす必要があった。

飛燕Ⅱ型乙に搭載されたハ一四〇発動機は過給器の調整が難しい。

高度が上がるにつれて薄くなっていく空気を圧縮して発動機に供給するのが過給器だ。

通常の発動機では、出力軸に連結された歯車で過給器を駆動する。比較的低高度（たとえば三千メートル）で最高性能を発揮するように設計された過給器では、より空気の薄い高空では圧力が足りない。高々度で最適に設定すると、低高度では圧縮が効きすぎて発動機を過熱させてしまう。高度に応じて変速比を切り替えるものもあるが、せいぜい二速どまりだ。

理屈の上では、アメリカで実用化されている排気タービン過給器が理想的だった。タービンへ送る排気を弁で加減すれば、発動機の回転数に関係なく任意の吸気圧を得られる。排気の圧力で過給器を駆動するのだから、なにより軸馬力を食われずに済む。しかし日本の工業技術では排気タービンを作れない。千度を超える排気に耐えられる材料がない。

ハー四〇の過給器はフルカン継ぎ手駆動だった。発動機の出力軸から動力を取り出すのは同じだが、過給器を回すのは歯車ではない。

油の中に向かい合わせて配置された扇車が動力を伝える。現代の言葉でいえば、無段階変速のトルクコンバーターである。たとえ一万メートルの高々度でも、それなりの吸気圧を得られる。飛燕が一万メートルでも編隊飛行可能と評価されたのも、この過給器によるところが大きい。

ただし調整が悪いと、扇車で無駄に油をかき回して馬力を食ってばかりになりかねない。地上で何度も発動機を全開にして調整する必要があった。

速度と高度に応じて発動機を最適の状態で運転することにはそれなりに熟達している沙智だったが、こういった根本的な原理や特長はほとんど知らなかった。自動車も運転したことのない娘を半年かそこらで一人前の戦闘機搭乗員に仕上げようというのだから、速成教育もいいところで、たとえば飛行機の翼が揚力を発生する原理も、沙智は詳しく知らない。失速から錐揉みにおちいったとき、なぜ

そういうことが起きるのかを知っていても、だからどういう操作をすればよいかを考えている暇はない。補助翼を中立にして方向舵は回転を止める側にいっぱい、軽く操縦桿を押す。これを身体に覚えこませるほうが、ずっと大切だ。

とはいえ。自分の命を託す、海女にとっては船でもある飛燕のことをより深く理解して、沙智は目を開く思いだった。

二日目には尻の痛みも軽くなって、沙智は積極的に整備を手伝った。何か手伝えることはないかと観察していると、意外にも彼女にしかできない作業があった。操縦索の点検である。胴体に設けられた整備口から手を伸ばせば接続個所の点検ができるし、金具の交換も手さぐりでできる。しかし、小柄な男性と比べても肩幅の狭い沙智なら、操縦席の後ろから胴体にもぐりこんで、目で見ながら金具に触れられるのだった。

「螺子をふたつとも緩めればいいんですか

あ？」

「尾翼側のやつだけだ。半回転だけ緩めて、力いっぱい索を引き込め……はい、止めて」

「はい。もとどおりに締めればいいんですね？」

こんな調子で、驚くほど能率が上がった。

「整備兵にも娘っこを大量に採用してほしいもんだ」

掌整備長の上島曹長が笑いながら言ったものだった。

「おまえさんのおかげで、半分の時間でかたづいた。搭乗員をクビになったら、うちで拾ってやるぞ」

将校と下士官の間には越えられない壁があるのは事実だが、飛燕を介して命を預けている、命を預かっているという信頼関係があった。

「……………」

沙智が顔を曇らせたのを察して、曹長は話題を変えた。

「まあ、南方からも戦闘機搭乗員をかき集めているご時世だ。おまえさんにうちへ来てもらうのは無理かな」

それでも、沙智の顔は晴れない。

「ところで……飛燕Ⅱ型乙。これが乙女の乙ってのは知ってるかな？」

年頃の娘を扱いかねている父親の心境とでもいったところだろうか。曹長はあれこれと話を振ってくる。

「Ⅱ型改だと思ってましたけど？」

「それをさらに改造したのが、乙型なのさ」

話題に食いついてきた沙智に、妙に歯切れのいい江戸っ子弁でたたみかける。

羽衣部隊の搭乗員の体重は、標準的な戦闘機搭乗員より七キロほど軽い。酸素欠乏に強いから、搭載する酸素壘も半分ですむ。主翼の十三ミリ機関砲を二十ミリ機関砲に強化しても（合計火力は二十ミリ×四）、まだお釣りがくる。軽ければ機体の強度を落としても安全だというわけで、主翼と胴体との結合に六

本使っているボルトを四本に減らした。結果として乙型はⅡ型改より五十キロ以上も軽く仕上がり、それだけ上昇率も向上している。「つまり、乙女専用の戦闘機ということだ」「ふうん……」

沙智の反応は鈍い。

「どうした？ 得心がいかんのか？」

「そういうわけではないです。でも……」

下村少佐の乗機である四式戦が、なんとなく引っかかっていた。四式戦は大東亜決戦機の誉れも高い、陸軍の最新鋭戦闘機だ。三式戦Ⅱ型乙より四式戦のほうが速度、上昇率、上昇限度のすべてで上まわっている。故障も少ない。超重爆に挑む大和撫子とかもてはやされているわりに、妙にいじくりまわされた中古の戦闘機をあてがわれているような……「馬鹿もの！」

上島曹長が顔を真っ赭にして怒鳴った。何事かと、若年ぞろいの整備兵が振り返った。

「まったく……俺だってケツバットを食らわ

せてやりたくなるぜ！」

怒鳴ったあとは年の功というべきか。興奮を鎮めて、曹長が説き起こす。

上昇限度は基本的に発動機で決まる。空気が薄くなって出力が落ち、上昇の余力がなくなる高度だ。疾風も飛燕も全備重量は四トン弱でありあまり違わないのに、あっちの離昇出力は一千八百馬力でこっちは一千五百馬力。しかし、疾風の上昇限度が一万二千メートルでも、実際には一万メートルあたりで、すでに失速寸前の頭上げ。金魚がアップアップしているようなもので、戦闘機動は非常に困難だ。

高々度での運動性能は主翼の縦横比に左右される。細長い主翼のほうが有利なのだ。飛燕は日本の戦闘機の中では、もっとも縦横比が大きい。飛燕の上昇限度は一万一千メートルだが、フルカン継ぎ手駆動過給器のおかげで、一万メートルでは疾風よりも実質的には馬力に余裕がある。

「つまり、総合的な高々度性能は飛燕が一番

だ」

「……？」

上島曹長の言う理屈はわからなかったけれど、飛燕が高々度戦闘機として最良だという彼の信念は心に響いた。

三日目になると、整備の仕事が面白くなった。発動機と操縦系統とでは整備の仕方がまるきり違うし、計器の較正も機関砲の調整も、あれもこれも分野の異なる技術だった。飛行機とは科学と工業力の集大成であるということが、自然と理解できた。

こんなこともできるのかと驚いたのは、熱間圧延形鋼という素材だった。『く』の字形や『コ』の字形、『H』のような切り口をした何メートルもある鉄材。折り曲げたり継ぎ合わせたりして作ったのではなく、溶けた鉄を口金から押し出したのだという。こんな形の心太<sup>ところてん</sup>とか作ったら面白いだろうなと思ってしまったのは、やはり少女だからだろうか。

一方で淋しい(それ以上の否定的な表現は、

軍隊では許されていない) 出来事もあった。

五日ぶりに邀撃戦闘が発令されて。二個小隊八機のうち二機は、初めて二期生が指名された。四十名で発足して、不適合(十名)とも判定されず訓練中に殉職(一名)もせず重傷(五名)も負わずに残った、選りすぐりの二十四名の中からの二機だ。自分が選ばれたはずだという自惚れはなかったけれど、選抜の対象からはずされたという悔しさは残った。

しかし、そんな感傷は飛燕が帰還するまでの短い時間しか許されなかった。基地へ戻ったのは六機。下河内中尉は重傷を負いながらも落下傘降下して生還したが、大田少尉が被弾炎上して敵機に体当たりを敢行。二期生が挙げた最初の戦果であり、二期生で最初の戦死者だった。

帰還した六人は疲労困憊して早々に隊舎へ引き揚げた。それからが、沙智と整備兵の戦争だった。

六機のうち五機が被弾していた。発動機を

やられて滑空で辿り着いた機もあれば、胴体を穴だらけにされて奇跡的に操縦者が無傷だった機もある。それらを可能なかぎり修理して、明朝には列線へ戻さねばならない。

「ほじゃ、まあ……ぼちぼちやるべよ」

「自分は握り飯を確保するであります」

口調だけはのんびりと、テキパキ身体を動かし始める整備兵たち。

沙智は小柄な身体を活かして、弾痕の修理を手伝った。外飯に穴が開いただけの個所にはジュラルミンの薄板を当てて周囲を加締めるのだが、裏側から金床をあてがってリベットを打ち込む衝撃を受け止める必要があった。沙智なら、胴体の細い部分まで楽に手が届く。

いざリベット打ちが始まると、とんでもない重労働だとわかった。耳元で機関銃が発射されるような轟音と、腕をもぎ取られそうな衝撃。しかも真夏。狭い場所にばかりもぐり込んでいる沙智は、たちまち汗でびしょ濡れになった。

穴ふさぎなどは簡単な修理で、やっかいなのは油圧や発動機だった。油圧配管の交換は沙智も油まみれになって手伝ったものの、発動機の分解修理となると出番はない。整備兵の邪魔にならないよう気をつけながら、剥ぎ取られた穴だらけの外板を屑置き場へ運んだり、予備部品を棚から機側へ持って行ったりと、まめに立ち働いていたが、動作に無駄も多く、六時ころには足がもつれて何度も転びかける始末だった。

「飯食って風呂はいつてきなさいよ」

「でも、皆さんが頑張っているのに……」

「なあに。俺たちは働きながら休んでる。池澄さんみたいに気を詰めてたら、身体がもたないからね」

最初と同じ調子で整備のハカをいかせながら、艀装班長の上等兵がいたわってくれる。それでも言葉に甘えるのを潔しとしないで迷っていると、上島曹長にどやされた。

「すっ転んで螺子でもぶちまけられたら迷惑

なんだよ。とっとと休んできな」

それで沙智も観念して、整備小屋を後にした。隊舎へ寄って替えの衣服をそろえてから、飛燕搭乗員専用の風呂——つまり女湯へ行った。

いつもはわいわいきゃあきゃあ、磯小屋そのものの風呂場だが、今日はお通夜のような静けさだった。いや、「ような」ではない。太田昭子少尉のお通夜そのものなのだ。空中勤務を禁じられている沙智は、自分ひとりだけが余所者のような思いを噛み締めて、早々に風呂を出た。そして、重い足取りで兵員食堂へ向かう。

沙智が食堂に姿をあらわすと、水を打ったような静けさになる。もともと食事中の私語は慎むべしとされているのだが、黙っていても食卓には華やいだ雰囲気があり、ざわめきがある。それらがパタリと途絶えるのだ。

何十人もの下士官兵の中の紅一点。しかも、本来の階級は少尉。まさしく沙智は余所者だ

った。そのうえ、この中の何割かの男たちは彼女の裸身をしっかりと見ていた。整備の手伝いはむしろ楽しいくらいに感じていた沙智だったが、この食事時間だけは懲罰そのものだった。

材料も栄養価も味付けも（自腹で食材を購入して好みのものを作らせる）将校向けの食事とは格段に落ちる（軍隊支給の）兵員食を意地でも完食して、沙智は食堂から逃げ出した。

それでも肉体は現金なもので、満腹感が疲れをいやしてくれたし、乾いた衣服が肌に心地よかった。昼間の熱気も、ずいぶんとやわらいでいる。元気を取り戻した沙智は、張り切って整備小屋へ戻った。

とはいえ、しょせんはカンフル注射。午後九時には完全にばててしまった。

「もういいから、今日はあがれ」

上島曹長の有無を言わさぬ強い命令に、今度は素直に従った。足手まといどころか、み

んなの足を引っ張りかねなかった。灯火管制の暗幕から漏れ出る明かりを何度も振り返りながら、沙智は隊舎に戻った。作業服を脱いで襦袢だけになると、そのまま寝台へ倒れるように転がりこんだ。

気疲れと肉体の疲労、それにこの二日間は眠りが浅かったせいもあって、沙智はそのまま泥のように眠った。

深夜に目覚めたのは、尻の痛みのせいではなかった。闇の中に人の蠢く気配と荒い息遣い。そして寝台の軋む音。沙智は闇の中で身体を固くして、耳に神経を集中した。

「むっ……むっ……むん」

無声の気合とでもいった、若い男の息遣い。

ぐちゃ、ぐちゃ、じゅぶ……と、湿った響き。

「あっ、あっ、あっ……」

和子の甘い悲鳴。

窓際の寝台に、まだ痛む尻をかばって沙智

はうつ伏せに寝ている。いつもの習慣で、顔は窓に向けていた。紗の引き幕を透かして、滑走路の向かい側にある整備小屋から漏れる明かりが見えた。あっちとこっちとが同じひとつの世界にあることが、なんとなく不思議な気分だった。

「和ちゃん……俺、もう……」

「だちゃかん……！」

ふっと気配が途絶える。

(すんだのかな？)

沙智は、そっと顔を和子のほうへ向けた。和子は左手で男の胸を押し返すようにしながら、右手を結合部へあてがっている。男の付根をぎゅっと握った白い指が、かすかに光って見えた。

和子が不意に沙智を振り向いた。

(わ……！)

あわてて目を閉じたが、たしかに一瞬、ふたりの視線は絡み合っていた。

「ふふ……」

和子の起き上がる気配。しかし、沙智に遠慮したわけではなかった。ふたたび軋み始める寝台。

好奇心に負けて、沙智は薄く目を開けた。和子が男に馬乗りになって、腰を妖しくくねらせていた。肩の上で切りそろえた髪が、激しく揺れ動いている。

(やだ……)

どうせ和子のほうから誘ったにきまっているけれど、女は男に抱かれるものだ。女が男にまたがるなんて、あまりに破廉恥だと思った。

(でも……)

たいがいの男は自分の欲望に目がくらんで、女の快感を引き出すことがおろそかになるという。そして女はじゅうぶんに開発されると、男の何百倍もの快感を味わうそう。だから、自分が満足できるように動くのだろうか。

磯小屋でも隊舎でも、耳だけはたっぷりと鍛えられてきたけれど。男とは口付けすら交

わした経験のない沙智には、男女の営みは別世界の事柄にしか思えなかった。ただ――和子によって引き出される快感を体験してからは、身体を弄ばれるたびに深まる性感にかすかな恐怖さえ感じながら、たとえば末岡ハナのよがりようと比べれば、自分はまだ豊穡な大海の浅瀬で水遊びをしている幼子に過ぎないのではないかという直覚が、おぼろに浮かぶときがあった。

「あん、あん、あん……」

和子の喘ぎが甘やかに切迫する。ギシギシと寝台が鳴る。和子は左手で自分の乳房を揉み立てながら、右手を結合部へ這わせている。月明かりを透かして目を凝らすと――和子は男を握っているのではなく、女のもっとも鋭敏な突起を激しくこすっていた。

(ずるい……)

沙智は、男にではなく和子に嫉妬した。あんなに乱暴に、そこを蹴られたことはない。

沙智はうつ伏せた腰をかすかに浮かして、

和子から見えない側の左手をそこへ差し込んだ。襦袢の下は官給品に準じた越中褌だった。

女褌は、海に潜るときと空を飛ぶときしか身につけない。六尺褌を短くしたようなもの、腿までしかない腰巻、猿股、沙智のような最小限度の布切れ——地方によって形に違いはあるが、羽衣部隊の女たちは、みなそうしている。それが、海女の心意気というものだ。

沙智は木綿の布の縁から指を滑りこませて、そっと自分をさわった。ぴくんと全身が跳ねた。

「あ……」

声が出て、あわてて枕に顔を押しつけた。耳だけで和子をうかがう。

「あっ、あっ、ああ、ええ……まんでええ！」

その声にあわせるように、沙智の指も動き始めた。

地上勤務を命じられて一週間が過ぎたとき、異例の人事異動があった。下村万蔵少佐が部

隊長の職を解かれて、東雲忠二少佐が着任した。異例といったのは、下村少佐が大尉に降等されて、あらためて空戦指導教官に任ぜられたことだ。降等そのものが滅多にないことだし、原隊にとどまる例は更に珍しかった。

羽衣部隊にとって必要不可欠の人材だが、海軍への遠慮もあって、深山を喪失した責任をとらせたということだろう。

池澄少尉は沙智個人として、複雑な気持ちだった。下村少佐が一階級降等なら、自分は二階級も三階級も落とされなければならないと思う。その一方で。乙女の恥じらいも顧みず、あんな制裁を加えるような人間に、これからも指導されるというのは、あまり嬉しいことではない。

### 3. 敵前逃亡

空中勤務への復帰を認められた日に、編成替えがおこなわれた。一期生十一人と二期生二十三人から十名ずつが選ばれて、五個小隊が作られた。体調によっては臨時の入れ替えもあるが、基本的には固定された編成だ。二個小隊が輪番で即時発進の準備をととのえて待機する。稼動機数によっては、もう一個小隊が第二陣として控える。

いよいよ二期生が本格的に実戦参加することで、羽衣部隊の戦力は強化された。稼動機数が増えたわけではないが、順番に休養をとることで気力体力ともに充実するし、一期生も訓練の時間を持てる。

二期生から選抜された十名の中には、池澄少尉の名前もあった。本人にとっても同期生たちにとっても意外な人選だったが、一期生たちは別段驚かなかった。見る者が見れば、

池澄少尉の技量は明らかだった。

初日が非番の池澄少尉は、ひさしぶりの訓練を受けた。B 2 9の大きさに匹敵する飛行機がないので、ポンコツの九三式重爆に曳航させた滑空機の主翼をB 2 9の水平尾翼に見立てて射撃した。十日ぶりに操縦桿を握ったにもかかわらず、池澄少尉は三発の命中弾を得た。実戦なら四門合計で十二発の二十ミリ弾。しかし、下村大尉の評価は厳しかった。離脱時の突っ込みが甘く、実戦なら主翼を敵機の胴体にぶつけていたというものだった。避退操作はひねりながらの急降下が最適なのだが、そうすると敵機がかぶさってくる。敵機に向かって操縦桿を突くには、度胸がいった。どうかすると中途半端になってしまう。

「下村さんは、ああ言うけど」

訓練後の講評も終わって、隊舎へ戻って飛行服を脱ぎながら。厳しい評価にしょげている沙智を和子が慰める。

「ほんまに水平尾翼を壊したら、敵はケツ尾

を跳ね上げるし。まっすぐ飛んでもジャマないな」

「でも、撃破できなかったら？」

「ぶつければええ。避退操作の途中じゃけ、おぞいことにはならんわ。翼端を引っ掛けるくらいですむ。こないだのあれは……運が悪かったワ」

体当たりになりかねない操縦を後輩に平然と教え、生死を分ける事柄を運で片付けてしまう。戦場の心理とってしまえば、それまでだが。浮上の時機を誤って息が続かなくなったり、海藻に足を絡めとられたり、はぐれ鮫に襲われたり——と、海女の仕事は常に死と隣り合わせだ。

「けど、姉さは……？」

能崎中尉は、いくら指摘されても敵機上方への避退動作をあらためようとしない。単独撃墜二、共同撃墜四の実績があるから、下村大尉も好きにさせているようだが——尾部が跳ね上がるのなら危険ではないかと思った。

「水平尾翼は片側しか壊せんわ」

沙智の疑問に先回りして答える和子。

「どうかすると、そのまま飛びよるやつもある。けど、垂直尾翼がなくなれば、どもならんワ」

垂直尾翼を狙うには、浅目に高目に突っ込む。そこから操縦桿を突けば、それこそ胴体に正面衝突しかねない。

「ま、一緒に飛んでみれば得心するやろ」

能崎中尉は小隊の三番機。戦闘時には二機を単位とする区隊の長として四番機を率いる。その四番機が池澄少尉なのだった。

汗で濡れた襦袢の上から略服を羽織ろうとしていた沙智の手を和子がつかんだ。

「お風呂、行かなきゃ」

「あとでえーよ」

自分の寝台に引き倒して。窓辺へ歩いて引き幕を閉めた。

沙智は倒れたときの姿で横臥して、襦袢の裾をなおそうともせず、じっとしている。そ

うしているだけで鼓動が早くなって、股の奥がじわあっと熱くなる。空中衝突の三日前には沙智の生理的事情で誘いを拒んでいたから、半月ぶりということになる。

「沙智の汗は甘いけん……」

前をはだけられて、沙智は軽く唇を噛んだ。子供を産めばいくらでも母乳を出しそうな和子と違って、沙智の乳房は自分の掌にすっぽりとおさまってしまう。男の目から見れば、引き締まった体軀に似つかわしい、清楚で初々しい乳房なのだが、そういった審美眼は沙智にはない。

その引け目を感じている乳房に、和子が舌を這わす。それだけで、沙智の上半身がピクッと震える。

「沙智は男の子ばかり産みそうじゃの」

深く感じているときには男子を懐妊しやすいという言い伝えにかこつけて、和子がからかう。

沙智の汗をたっぷり味わってから、和子は

裸身になった。女禪からはみ出さないように丹念に手入れされた茂みが、ほどよく張った腰に申し訳程度にへばり付いている。

沙智は身体を起こされて、和子の乳首を自分のそれにこすり付けられた。

「ひゃん……」

同じ条件で同じ部分を刺激しあって、先に声を漏らすのは、きまって沙智だった。

沙智は和子の太腿をまたぐ格好にされて、いっそう強く乳房を押しつけられた。ぐにゅんとひしゃげる乳房の感触。和子の顔が重なってきて、口を吸われた。

「あむ……むん……」

二期生同士の相部屋から和子との相部屋に替わったのは三か月前。その日のうちに唇を奪われた（だけでは済まなかったのだけ）。そのときは一方的に口の中を蹂躪されただけだったが、今は反撃も覚えた。侵入してきた和子の舌を絡め取って、舌で舌を舐める。

ぴちゃ、ぶちゅ、じゅる……唾液にまみれ

た音が、沙智を煽った。

沙智の女禪に和子の手がかかる。沙智は心持ち腰を突き出した。腰紐に巻き込んである布の端が手繰られて、沙智の股間が無防備になった。たった一枚の小さな布切れ。それがあると無いとでは大違いだった。それさえあれば昼に浜辺を歩いても平気だったし、海の底へでも潜っていける。けれど、取り払われてしまうと――恥ずかしいのはもちろんだが、心細くさえあった。そして、ますます熱く潤ってくるのだった。

そういった心理は、同じ土地の同じ海女である和子にはお見通しだった。

「こんなに濡らして、いけん子じゃね」

じゅぶっと、指で穿たれた。

「だちゃかん……」

操縦桿を倒してもいないのに、ぐるんと世界が傾いたような錯覚。沙智は和子の肩にしがみついた。

「毛の薄い女は淫乱じゃいうけど……沙智、

おまえもそうけ？」

「やめさっし……」

短い毛をツンツンと引っ張られて、沙智は甘えた声で抗議した。手入れをしなくても、沙智の陰毛は掌どころか指三本で隠れてしまう。その短く淡い毛をかき分けて、和子の指が敏感な突起を転がす。

「だちゃかん……」

土地の言葉を沙智が繰り返す。

「だちゃかん……もっと、きつうに」

自分の言葉を耳で聞いて、沙智はハッとなった。とんでもないことを口走ってしまった。けれど、いまさら取り繕ったところでどうしようもない。

「もっと、きつうに……姉さが自分にしとったみたいに」

ふふっと和子が耳元で嗤った。くりっと包皮が剥きあげられた。

「こうけ？」

剥き出しになった実核が、きゅっと摘つま

まれた。

「ひゃんっ……！」

衝撃が背骨を駆けあがった。

くりんくりんと左右に捻られ、ぎゅっと引っ張られる。それは鋭い痛みだった。

いっぱい捻られると、沙智の汗にまみれた指の腹で粘膜がにゆるんと逃げる。それは、その一点が爆発するような快感だった。

「うあっ……ああ！」

「やかましよ」

沙智はあお向けに投げ出された。後ろ向きになった和子が、沙智の顔に尻を落とした。

「ふぐう……」

沙智の口に生臭い磯の香りがあふれる。

和子は沙智の股間を覗きこんで、また敏感な突起を虐めにかかる。

「んぐーっ、むうう！」

負けじと、沙智は和子の肉褌を舌でえぐった。

「くふ……こそがしいだけじゃ」

尻を揺すって舌の動きを要求しながら、和子は三本の指で実核を虐める。さらに左手をその下へあてがって指を――生娘の沙智を気づかかって一本だけ――深々と突き立てた。そうして、穴を広げるように指を動かす。

「ひゃぶ……むぶう！」

実核を責められる痛みと快感に圧倒されて、そこへの悪戯は刺激をあまり感じなかった。しかし、女が女である根源を犯されているという背徳感が、沙智をいっそう喘がせた。

「おぼこのしるしが、こりこり当たりよるよ」

沙智は和子の股間に組み敷かれたまま、いやいやをした。が、突き飛ばして逃げたりはしなかった。それまで所在無げに投げ出していた腕を和子の太腿にまわして、自分が責められているのと同じ場所へ指を這わせた。

そこはすっかり硬くなって、粘膜の先端は包皮から顔を出していた。それを一気に剥いて、自分がされているのと同じように揉み立てた。

ビクッと和子の尻が浮かんで、そのままストーンと沙智の顔面に落ちた。

「んっ……！」

一瞬顔をしかめた沙智だったが、さらに激しく実核をこねくり回す。

「ええ……それ、効くう……」

上体を起こしていられなくなったか、沙智の股間に突っ伏す和子。沙智が身体をひねって、今度は自分が上になった。

どうせ両隣には筒抜けだけれど、それでもよがり声を押し殺そうとして股間を相手の顔に押しつけて、両手まで動員して責め合うふたり。夏の遅い夕暮れは、まだ始まったばかりだった。

翌日は当直勤務だった。昨夜の痴態なんかなかったかのように澄まして、能崎中尉と池澄少尉は待機所に詰めていた。さすがに夜更かしがたたったか、能崎中尉は居眠りをしている。本を読む者、遠くの緑を眺めて目を休

める者、陸軍将校らしくもなく編み物に精を出す者、陸軍将校としてはともかく女性としてはどうかと思うほど胸をはだけて風を扇ぎ入れる者——当直の八人は思い思いに時を消している。

午前十時過ぎ。隣の戦闘指揮所で電話が鳴った。ただちに集合がかかった。中隊付の泉中尉が、概況を説明する。

大型機の一群を足摺岬沖三百キロにて探知、推定高度五千メートル。現在の針路北東、針路上に該当する爆撃目標無し、爾後変針するものと思われる。二個小隊にて邀撃。第一小隊は進路南南西、待機予定高度六千。第二小隊は針路西南西、待機予定高度同じ。

「かかれ！」

後から駆けつけてきた東雲少佐が搭乗員に号令をかけてから、すでに集合している整備兵に向かって大声を張り上げた。

「回せーっ！」

列線の飛燕に、整備兵がわらわらと取りつ

く。

池澄少尉は第一小隊の四番機へ駆けて行って、整備兵が立てかけた梯子を上がって操縦席についた。安全帯を装着。落下傘の縛帯を飛行服に、自動開傘索を掛け金にしっかりとつなぐ。地上員がイナーシャを回しているあいだに、操縦桿を動かして舵面と正しく連動していることを目視、計器類の示度を順に読み取って。点火スイッチ、両側。

「コンターック！」

整備兵が機首から離れると同時に発動機をイナーシャに接続。一発で始動した。

飛行眼鏡をおろし、しっかりとブレーキを踏んでから、風防の外へ両腕を突き出してサッと後ろへ振る。整備兵が車輪止めを払った。池澄少尉は三番機の斜め後方につけて滑走路へ向かった。

滑走路の幅いっぱい広がった菱形で滑走路へ進入。一番機の小島中尉が風防から顔を突き出して後ろを振り返った。二番機以下が

右腕を上へ突き出して、準備良しを伝える。  
無線通信は必要最小限しか使わない。

小島中尉の顔が引っ込んで、一番機が爆音を震わせて滑走を開始。池澄少尉は三番機の挙動を見ながら、ガスレバーをゆっくりと押し進めた。

バロロロロ……ブオーッ！

訓練機のように咳き込むこともなく、発動機は吹き上がる。飛燕は砂煙を巻き上げて疾走する。ふわりと宙に浮いて。安全速度まで達してから脚を収納して下げ翼を戻し、最後に風防を閉じてから操縦桿を引いた。

急上昇する飛燕。五千メートルまで五分。そのあいだに舵の利き具合を再確認して、機関砲の試射をすませ、光像照準器の点灯を確認して、水温と油温に応じて冷却器扉の開度を調節して、点火スイッチを片側ずつ切り替えながら発動機の調子を見て……そして、三番機について行く。

そのあいだにも基地から無線連絡がはいる。

敵編隊は四機二群。高度七千からさらに上昇中。護衛戦闘機無し。八千まで上昇して挟撃をかけよ。

（うわあ……！）

池澄少尉は武者震いした。敵の戦法が夜間の低空爆撃になってから、羽衣部隊の活躍の場は減っていた。たまに昼間爆撃があっても多数の護衛戦闘機が随伴しているので、格闘戦のできない部隊には出撃命令が下されなかった。最近では、高々度を少数で飛来する偵察機（それはそれで絶対に撃墜しなければ、後日の大空襲を招くのだけれど）くらいしか獲物がなかった。ところが今日は――八機対八機。初陣を飾るにふさわしい。

（やってやる！）

超重爆に喰らいついて二十ミリ弾をぶち込んでやる。運が悪ければ防御砲火にやられる。操縦を間違えれば、また空中衝突しかねない。それでもいい。今度は敵だ。気兼ねなくぶつけてやる！

訓練用と同じ機種とは思えないほど快調に発動機は回っているのに、六千メートルを超えたあたりから上昇率が目に見えて落ちはじめた。発動機には過給器がついていても、揚力を生む主翼は空気密度の影響をもろに受ける。

三番機の位置を確認して、空中見張を厳に実行して、計器板をざっと見渡して冷却器扉の開度を調節して、そしてじりじりしながら高度計と昇降計を見つめる。まだ六千五百メートル。

「あ……！」

高々度に昇った経験の少ない池澄少尉は、重大な失策を犯しかけていたことに気づいた。空中勤務者規則では五千メートルを超えたら与圧面を装着しなければならない。しかし、飛燕Ⅱ型乙の酸素壘は本数が少ない。羽衣部隊の隊員は皆、六千までは使わない。

左手をガスレバーからはなして単語帳のようなものを膝ポケットから取り出し、適当に

めくった。

$$5 \times 7 - 12$$

(ごしちさんじゅうごで、にをひいてさんで、  
じゅうをひいて……にじゅうさん)

裏を見ると正解だった。もう一枚をめくって、これも正解。

(まだ大丈夫)

適性検査を受けた半年前のことを思い出した。高度八千メートルを飛ぶ輸送機の中で、四人の海女たちは与圧面をつけていなかった。太い管につながったお面をかぶった達磨のような検査官から算術の問題を渡されて、沙智は頭を抱えこんだ。足が全部で三十二本もあるという化け物みたいな動物が何匹いるかという問題だった。鶴の足は二本で亀の足は四本。合わせて六本。どう考えても、三十二本になるわけがない。

「いじめんといてください！」

沙智は検査官に食ってかかった。ほかの三人も呆然としている。それでも、四人とも抜

群の高空適性と判定された。与圧面も防寒着もなしでケロリとしていること自体が、常人では考えられないことだったのだ。

高度七千で与圧面を装着した。高度八千に到達したとき、新たな指令を受信した。

『敵編隊の高度は九千。羽衣は針路そのまま。天女は〇二五に転針して敵に先行せよ』

邀撃高度に達する前に敵が通り過ぎてしまう懸念が生じた。第二小隊は敵と同方向に飛んで出鼻を押さえろという指令だった。

八千から先は、さらに上昇率が低下した。逆に、ちょっと失速したり旋回で滑ったりすると、簡単に何百メートルも落ちてしまう。訓練機のブルブルガタガタ振動する発動機で三千メートルあたりを飛んでいるほうが、よっぽど楽だった。

八千五百……八千六百……

『敵発見！ 十時の方角！ 高い！』

一番機小島良子中尉の緊迫した声が、ビーンと響いた。

その方角を透かしてみると……いた。蒼い空に溶けこむように、透きとおった銀色の影が四つ浮かんでいた。

三番機がじわっと機首を転じた。それに追従しながら、池澄少尉は機の戦闘諸元をととのえていった。脚と下げ翼の格納を再確認。燃料噴射弁は全開で固定。機関砲の安全装置をはずして、光像照準器を点灯。

能崎中尉が右からすうっと寄ってきて、隣にならんだ。

『沙智、絶対に離れんといて』

池澄少尉は二度うなずいて返事に代えた。

十数分をかけてB 2 9編隊の右後方に高度差三百で占位。眼下の雲に、銀色の巨鯨がぼかりぼかりと乗っている。

敵もすでに気づいている。密集しながら、各機が高度をすこしずつ違えていた。

『羽衣一番、突入！』

一番機が主翼を立てて、最後尾の敵機に向かって突っこんだ。四百メートル後方から二

番機が続く。とたんに、四機の超重爆はハリネズミと化した。背中からも尻尾からも胴体の横からも真っ赤な針が飛び出して、二機の飛燕はその中に包まれた。

それを奇跡的にすり抜けて、一番機が急降下で避退した。数秒の間をにおいて二番機も避退。こちらは左主翼から銀色の破片を撒き散らしているが、会敵までに使い切るように翼内燃料を減らしてあったので、火は出していない。

『羽衣三番、突入——沙智、心中じゃ！』

三番機の左翼端が下がるのを見て、池澄少尉も操縦桿を左に倒す。二機の飛燕は一本の長い槍となって真っ赤なハリネズミに突っかける。

(くそっ、くそっ、くそう！)

赤く輝く針の流れは、顔の正面でなぜか左右に分かれていく。けれど、わずかでも射線をずらされたら、今にも灼熱が全身を貫くのではないかという恐怖を叱り飛ばして、先行

する三番機に目を据える。

三番機に火の針が突き刺さった！ のではなく、飛燕の機関砲が発射されたのだった。B29の垂直尾翼が爆煙に包まれた。しかし、びくともしない。三番機はぎりぎりまで射撃を続けて、紙一重の差で敵機をかわした。

三番機が右旋回で余勢上昇に転じた。敵の射撃が自分に集中する。

ひとりぼっちで敵中に取り残された心細さ。池澄少尉は照準器の中心に垂直尾翼を捉えて発射釦を押した。

ドドン、ドドン、ドドン……

機体をビリビリ震わせて発射された四本の太い火箭が、敵機に向かって伸びる。が、手前で火箭が交差して左右に分かれ、そのままおじぎをして届かない。

(しまった……！！)

逆上して距離の目測を誤った。そう悟った瞬間、押えつけていた恐怖が破裂した。右にひねりながら操縦桿を引きつける。方向舵は

逆舵。薄い空気の中で、飛燕は横倒しの姿勢で機首を上げて急旋回する。

十字砲火を下へやりすごしてホッとした瞬間。目の前に銀色の影が飛びこんできた。

「わああああっ！！」

方向舵ペダルを踏み替えたが間に合わない。三番機の風防に右翼端が直撃する一瞬を、沙智ははっきりと見てしまった。

「お姉さん！」

後方上空に取り残されてふらふらと漂う飛燕に、大声で叫んだ。

『脱出して！ 早く！』

一番機小島中尉の悲痛な呼びかけが池澄少尉の耳を打った。

——その日の戦果は無かった。三機が態勢を立て直したときには、B 2 9 の編隊から五十キロ以上引き離されていた。高々度では敵のほうが早いくらいだ。失った高度を回復して、なおかつ敵に追いつくことは不可能だった。別の一群に先行した第二小隊は、敵が針

路を変えたために会敵すらできなかった。

なんのつもりか知らないが、敵が爆撃したのは軍需工場のない小都市で、人的被害も少なかったことが、せめてもの救いだっただ。

「なぜ、最後まで攻撃を続けなかったのかッ！」

報告を聞くなり、東雲少佐が顔を真っ赤にして怒鳴った。下村大尉とは対象的な丸顔は、さながらの茹蛸だった。

「同じ経路で早期に避退動作を行なえば空中衝突することくらい、わかりきっておるではないかッ！」

「そういうものでもありませんよ」

横に立っていた下村大尉が、柔らかく反論した。

「敵機の未来位置に向かって飛ぶんです。同じ経路でも立体的には離れています」

「貴様、池澄少尉をかばうのか？」

「攻撃に失敗したら、まず離脱せよと教えた

のはワタクシです。教えを守って失敗したのなら、教え方が拙かったのです」

全裸制裁どころか、今度こそ軍法会議だと覚悟していた——いや、それを望んでさえいた沙智にとって、予想外の成り行きだった。衆人環視の中で若い娘を裸にして木刀で打ちのめすような人間が、同じ娘を今度はおかばう。理解できなかった。彼はなにか勘違いしているのではないか？

「違います。わたし……」

口をはさもうとしたら、一喝された。

「黙れ！　ワタクシとは何事だ。卑しくも陸軍将校なら一人称はワタクシもしくはジブンだ。女としての発言なら、聞く耳は持たん」

沙智はすぐに悟った。こんな無茶苦茶な論法で発言を封じたということは——下村大尉は真相を見抜いている。敵の集中砲火に怯えて、いわば敵前逃亡にも等しい振る舞いをしでかしたということ。もし、あとコンマ一秒でも敵機に肉薄して攻撃していれば……そ

れを承知の上で、かばってくれているのだ。  
でも、なぜ？ それがわからなかった。

「この件については、これで終わりだ。たしか、貴様は能崎中尉と同郷だったな。ご家族に連絡をとるなり、遺品を届けるなり、貴様の気の済むようにしろ。ただし……」

わざとらしい無表情（だと、沙智は看破した）で、下村大尉が言う。

「貴様が生意気にも本件について責任をとろうなどと思いがっておるなら——そう簡単には終わらんぞ。能崎中尉が健在なら墜としたはずの敵機、貴様が墜とさねばならん敵機、深山を壊した償い。すべて……せめて五機を墜としてエースになれ。それからなら、俺が介錯してやる！」

「以上だ。解散」

東雲少佐が重々しく告げた。

沙智は反射的に敬礼すると、隊舎に向かって駆け出した。涙が止まらなかった。お姉さんを殺してしまったという痛哭の涙。卑怯な

振る舞いをしてしまった自分への嫌悪の涙。  
かばってくれた下村大尉への感謝か恨みか判  
然としない涙。

「わああああーっ！」

二度と軋むことのない寝台に身を投げ出し  
て、沙智は泣き叫んだ。和子の残り香が、い  
っそう沙智を苦しめた。

#### 4. 前縁改造

自分はすくなくとも五発を水平尾翼に命中させている。それだけ二十ミリ砲弾を受けて無事なのはおかしい。敵機はこちらの戦法を見破って、尾翼にまで防弾板を貼っているのではないか。帰投時の報告で、小島中尉が指摘していた。

それが事実なら、五機どころか一機でも墜とせるかどうか。泣き疲れて、後悔と自己嫌悪の泥沼にもがきながら苦しい眠りに沈んで——夜明け前に目覚めて、池澄少尉が最初に思ったのはそれだった。

防弾板といっても、まさか戦車の装甲みたいに厚くはないだろう。二十ミリを何発も撃ち込めば破壊できるはずだ。五発でだめなら十発。

(そんなの無理……)

一昨日の訓練では三発を当てたけれど、あ

の凄まじい集中砲火にさらされて同じ成績を挙げられる自信はなかった（現に、昨日はゼロだった）。五発も命中させるなんて、神業かと思う。

（でも……）

避退を考えるから、最後まで射撃できない。最初からぶつけるつもりで突っこんだら、どうなるだろう？ 発射釦を押しっぱなしで。

だめだ。舵で弾着修正しながら突っこんでいけば、確実にぶつかってしまう。

避退操作をすこしだけ遅らせ……るのは、無理だ。訓練でも一回で汗びっしょりになるくらい集中して緊張している。訓練でもできないことが、実戦でできるわけがない。

（くそう……お姉さん、ごめん！）

空中衝突で和子を殺してしまっって、自分は生きている。どころか、乗機さえ小破ですんだ。

「……それだ！」

叫んで、沙智は跳ね起きた。寝台に座って、

まだ具体的な思考にまとまらない一瞬の啓示を宙に見据えた。

——朝のひと仕事片付く頃合を見計らって、池澄少尉は中隊長の執務室へ行った。

「自分が破損させた飛燕。あれの改造を許可してください」

順序としては教官である下村大尉に相談すべきなのだろうが、反対されると思った。東雲少佐の人柄はまだよく知らないが、昨日の様子からすると、下村大尉よりは脈がありそうに思えた。

「改造？ どこを、どう改造するのか？」

「主翼の前縁に山形鋼を取り付けます」

東雲少佐が首をかしげる。

「山形……貴様の郷は石川県だと思っていたが？」

「いえ、その山形ではありません」

池澄少尉は熱間圧延形鋼の説明をした。『く』の字形の長い鋼鉄を前縁に貼り付ければ、主翼を敵機にぶつけても壊れない——と

まで虫のいいことは考えていないけれど、自機の被害はうんと減るのではないか。飛燕の外飯は、拳で殴りつけただけでへこむし、金槌で叩けば穴が開く。B29が頑丈だといっても、飛燕と同じジュラルミンだ。ぺこぺこの弁当箱の親戚じゃないか。鉄にはかなわないはずだと、池澄少尉は考えたのだ。

「空中特攻するつもりか？」

椅子の中から、東雲少佐がじろりと睨む。

「もはや、一機一殺で間に合う戦況ではない。貴様は必ず五機は墜とすと、誓ったのではなかったか」

「わざと体当たりするつもりはありません。ぶつけても勝てると思えば、臆せずに突っこめます」

「結果としては同じことだが……」

ふうと息を吐いて、すこし考える東雲少佐。  
「簡便に装着できて、しかも衝突すれば必ず勝つ。そんな必殺兵器を航空廠が見逃しているとでも思うのか？」

「いえ、それは……でも、コロンブスの卵と  
いうこともあります」

「前縁だけ補強しても主翼の強さはあまり変  
わらんし、だいいち飛ばなくなる」

結論をぼーんと投げつけられて、池澄少佐  
は戸惑った。

「飛ばなくなる……？」

「前縁はジュラルミンの塊から削り出して  
いる。貴様が考えるほどやわいものじゃない。  
ああいうふうにくるしてあるのにも理由があ  
る」

前縁を尖らせると、迎角の変化による風圧  
中心の移動が大きくなって、操縦が難しくな  
る。そればかりか、失速特性が極端に悪化し  
て戦闘機動どころではなくなる。

「そういうものなんですか……？」

難しい用語を羅列した東雲少佐の説明はよ  
く理解できなかつたけれど——大学まで卒業  
した人たちが集まって知恵を出し合って作っ  
た飛行機だ。小学校しか出ていない海女の浅

知恵で改良できるわけがないのだった。

（でも……改悪でもいい。ぶつけて壊れさえしなければ……）

「どうも納得しとらんようだな」

黙ってうつむく池澄少尉を見て、少佐が困ったふうに頭を軽く振った。

「貴様のような強情なやつには、言って聞かせても始まるまい。よかろう。転換訓練用のⅠ型があったな。あれを使わせてやる」

「え……？」

突然のことに、上げた顔はぽかんと口が開いていた。

「ついて来い。ワシから掌整備長に話をつけてやる」

少佐が立ち上がって、スタスタと扉に向かう。

「はいッ！ ありがとうございます」

敬礼をしてから、池澄少尉はあわてて後を追った。

翌日の朝には、山形鋼を前縁に取りつけた飛燕Ⅰ型が準備されていた。

「翼内機関砲撤去しましたよ」

上島曹長が説明してくれた。一メートル当たり七キロもある山形鋼を翼幅いっぱいに取り付けると、七十キロ以上の重量になる。二丁のホー○三機関砲をおろして、とんとんの計算だ。

「……Ⅱ型乙も、こうなるのね」

火力が半減するのは痛いけれど、しかたがない。重量の増加は上昇力を落とす。

「どのみち、ぶつけるほど近づけば、翼内機関砲は役立たずさね」

戦闘機の固定機関砲は、おおむね二百メートル先で弾丸が一点に集中するように調整されている。たとえば五十メートルから撃てば、翼内機関砲から発射された弾丸は尾翼の前後をすり抜けてしまう。照準が左右にずれたときの保険には、まあ……なるけれど。

「離陸時は、すくなくとも三十キロ以上の余

裕をとれ」

これは下村大尉。大尉だけではない。基地の全員が、見物に集まっている。

（これで失敗したら……みんなに合わせる顔がないかな？）

そんなに思いつめてはいない。東雲少佐が失敗に太鼓判を押してくれている。うまくいけば儲けもの——と、虫のいいことを考えながら操縦席におさまった。

二度三度とコンタックしなおして、やっと発動機始動。やたらと跳ね上がりたがる水温を騙し騙し滑走して。

バアアーッ、バスン、バアアーッ……

思うように加速してくれない。飛燕Ⅱ型より三百馬力も非力で、しかも酷使されてきたハ四〇発動機なら、上島曹長が整備してくれてもこんなものだろう。

離陸速度に達して、尾輪を浮かした水平姿勢でさらに滑走をつづける。滑走路の端まで五十メートルで、操縦桿を軽く引いた。フワ

ッと浮いたとたんに機首がじわあっと下がりかけた。前へつんのめってプロペラが地面を叩かないように操縦桿を引く力をすこし足してやると、飛燕はヨタヨタと宙に浮かんだ。

すでに安全速度に達していた。下げ翼を戻して脚をたたみながら。上げ舵にとった瞬間、ガクガクと機体が震えた。失速の前兆だった。

（嘘……！）

失速特性が極端に悪化する——東雲少佐の言葉が脳裏に甦る。

操縦桿を突いて、地を這うように飛びながら増速。ふつうなら楽々と見下ろしている林が目前に迫る。じわっと、ゆで卵をつぶさないくらいの力で操縦桿を引く。それでも失速しかけてガタガタと機体を震わせながら、すれすれに梢をかわした。

「ふう……」

真夏の熱気と発動機の余熱にもかかわらず、腋の下を伝う汗は冷たい。

加速性能は劣化していなかった。時速三百

キロまで増速してから、もうすこし上げ舵にとる。今度は素直に機首を上げてくれた。けれど。左十五度傾斜で方向舵を左に踏んで、ちょっと上げ舵に引いたとたんに、またガクガクと失速の前兆。ほんとに、戦闘機動どころじゃない。場周飛行が命がけだ。

さらに増速すれば、四十五度傾斜でも旋回できた。でも、それが限界だった。垂直旋回は、とても無理。公称出力で引っ張って失速直前まで機首を上げて……上昇率は毎分三百メートル。三分の一だ。敵機の高度に達する頃には、爆弾を落とされている。

「あーあ……はあ」

言っただけでも始まらないと東雲少佐は言ったけれど。実行してみたら、一発で終わってしまった。

自分の思いつきに付き合っただけで突貫工事をしてくれた整備小隊のみんなに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

（お姉さんの分まで墜とすなんて……できっ

こない)

特殊防弾をしていないB29だって、単独で五機も墜とした者は羽衣部隊にいない。不可能な要求をした下村大尉の気持ちは、ひと晩考えてわかったように思う。死ぬな。大尉が言いたかったのは、そのひと言につきる。

それでも。意地でも。B29をバツタバツタと墜としてやりたかった。

## 5. 新型爆弾

それから十日の間に、四機または八機による昼間高々度爆撃が連日のように繰り返された。事前に探知できなかつたときもあったし、遠すぎて間に合わないために出撃が発令されなかつたときもあった。池澄少尉は運悪く、二度目の出撃はかなわなかつた。

羽衣部隊が邀撃したのは都合四回。撃墜は一機だけだった。味方の損害は（生還したものの被弾多数で全損扱いとなった機も含めて）八機。能崎中尉を含めて四名が戦死して一命が重傷を負った。その直前の邀撃戦（太田少尉と下河内中尉）を含めれば、七名の死傷者だ。

羽衣部隊の戦力は半減した。今年の一月に一期生が初陣を飾ってから半年の間に出した戦死者に匹敵する人数を短期間に喪って、部隊の士気はかつてないほどに落ち込んだ。こ

とに搭乗員はひどかった。待機所の中で泣きじゃくる娘さえいた。

その娘も、出撃を拒否したりはしなかった。自分が死ぬのは、それほど恐れていない。どれだけ入念に準備しても、慎重に行動しても、それをうわまわる不運に見舞われれば死を避けられない。海に潜って生活の糧を得ている彼女たちは、同時に海の気まぐれもじゅうぶんに知っていた。

死を恐れてではなく。仲間を喪った事実打ちのめされているのだった。

ただ一機撃墜したB29の残骸が調査されて、胴体後方と尾翼に徹底した防弾対策が施されていることが確認された。防弾板はもとより、尾翼の内部には発泡ゴムが詰め込まれていて、炸裂弾の爆発力を吸収するようになっていた。その報告を聞いた東雲少佐と下村大尉は、絶望的な表情でいつまでも黙りこくっていた。

そうして、人類史上に新たな悪魔の爪跡が刻まれる昭和二十年八月三日。

その日は小島小隊の当直だった。池澄少尉は三番機に抜擢され、僚機には小川典子少尉がついた。

待機所に詰めた直後の午前七時過ぎに出撃命令が下った。事前の概況説明は無し。まっすぐ北に向かって一万まで上がれとだけ指示があった。発見が遅れて、寸秒を争う事態なのだろう。

(あと二時間だけ、我慢して)

急上昇しながら、池澄少尉は左手で下腹を軽く押えた。今日あたりから生理が始まるはずだった。気圧の低い高空で出血が始まると大変なことになる。本来ならきちんと申告して搭乗割からはずしてもらわなければいけないのだが、千載一遇の復仇の機会を自分の手で葬り去るつもりなど、さらさらなかった。

いつまで経っても、高度を上げながら北上する羽衣小隊に転針の命令が出なかった。四

機はすでに山脈部を越えて北陸地方に達そうとしていた。

（敵の目標は新潟かな？）

裏日本では有数の軍需産業地帯だ。今日まで爆撃をまぬがれていたのが不思議なくらいだった。

（一発だって爆弾を落とさせてなるものか）

超重爆撃の任務に就く者には当然の気構えだが、池澄少尉の場合は個人的な思い入れも強かった。新潟市には姉の早苗が嫁いでいる。冬には子供も生まれる。両親からの手紙では、もうお爺ちゃんお婆ちゃん気分になって、出産で里帰りする姉を迎える準備を早々と始めているとか。

『敵編隊発見！ 七時の方角、やや低い』

今日も最初に敵を発見したのは小島中尉だった。池澄少尉も視力は二・〇なのに、どうしても先んじられてしまう。

（考え事をしてちゃ、だめだ）

ゆっくりと機首を巡らす一番機。池澄少尉

は細心の注意をはらって操縦桿を倒した。高度一万二百。ちょっとしたしくじりで、簡単に九千以下まで落ちてしまう。

外気温は氷点下四十度。電熱服に通電していても、冬の海に潜るより寒い。与圧面の中で、歯がカチカチ鳴っている。

右手に日本海が見える。越後平野の緑は半分以上が雲におおわれていたが、切れ目から灰色がかった新潟市がくっきりと見えた。予想どおり、敵編隊はその灰色に向かって直進している。

(こんな高々度から爆弾を落としても、狙いはそれるだろうに)

そのほうがありがたい。風向きのせいだろうか。敵は小島中尉の予測する未来位置の先へ先へと進んでいる。こちらが攻撃位置につくのと敵が爆撃を開始するのと、どちらが早いか五分五分だった。

——新潟市に敵が侵入する直前に追いついた。情報では四機ということだったが、会敵

してみると三機だった。爆撃の意志がないのか、極端に散開している。逆三角形の編隊を組んだ最後尾の敵機は機首を上げてふらふら飛んでいる。発動機に不具合が生じたのかもしれない。

弱った獲物に喰らいつくのが猛禽の習性。

『羽衣一番、突入』

グーンと敵機の鼻先に回りこむ小島中尉。一瞬で真紅のハリネズミと化す敵機。

一番機が射撃距離に詰め寄る寸前、ふわりとB29が浮き上がった。と同時に、巨大な爆弾が投下された。

垂直に動かれては、狙いようがない。一番機は虚しく敵機のはるか下を通り抜けた。二番機も同じ。

爆撃を終えて帰途につこうというのか。敵機はばらばらに急旋回を始めた。池澄少尉から見ると、獲物が飛びこんできたようなものだ。

『羽衣三番、突入！』

叫んで、B 2 9 の垂直尾翼めがけて機をひねった。

敵の火箭が眼前で左右に分かれる。もう気にしない。光像照準器に目を据える。

(まだよ……まだ、まだ)

光像照準器いっぱいにかぶさる垂直尾翼。ここぞと、発射釦を握る。

ドン、ドン、ドン……二十ミリは、曳光弾でなくても飛跡が見える。徹甲弾が垂直尾翼の付根に吸い込まれていく。しかし、垂直尾翼は平然としている。炸裂弾と焼夷弾は、防弾板の上に煙と炎を広げるだけだ。

「くそう……！」

歯ぎしりしながら操縦桿を引いた。間一髪でかわして飛び違った直後、機は失速して機首が下がった。錐揉みにおちいろうとするのへ方向舵を当てて。操縦桿の手ごたえが回復するのを待つ。

八千五百メートルで機を立て直して、上空を探した。

不意に。グワアッ……と、下から吹き上げられた。上下左右に揺すぶられ、転がされた。ビリビリと機体が震えて、今にも空中分解しそうだった。

空中衝突の一瞬に感じた衝撃。それを何倍にもした衝撃が、熄むことなく続く。蒼天も雲も海も、クルクルと回っていた。その中に巨大な火球が生じていた。

(あれは……！?)

一瞬に頭上へ飛びすきった火球は、ぐるりとまわって風防の下から出現したときには、ひとまわり大きくなっていた。必死の操作で機の安定をはかりながら、可能なかぎり火球を目で追った。

乗機が回転していたからよかったのだ。もしも火球を注視していたら、確実に視力を奪われていただろう。その眩しさゆえにはなく、致命的な放射線の影響で。

なんとか機の操縦を取り戻したときには、新潟市の上空にキノコの化け物のような雲が

聳えていた。キノコの根元は市街地をおおいつくし、真っ赤に染まっていた。

能崎中尉のときは、翼端が本人の身体に当たっていなかったかもしれないという奇跡に祈った。しかし、これでは……新潟全市が焼き尽くされようとしている。身重の姉が遠出するはずもない。池澄少尉は姉の死を確信した。その名を呼ぶ気力すら失せていた。

翌日、第〇七五独立飛行中隊は山口県への移動を命じられた。その周辺には、新潟と同じような条件の都市が散在していた。広島、小倉、長崎。いずれも重要な軍事拠点でありながら、これまで爆撃をまぬがれていたか軽微な被害しか受けていない都市だった。

羽衣部隊への移動命令と同時に、全軍に厳命が通達された。

敵ハ威力大ナル新型爆弾ヲ開発セリ。昼間少数機デ高々度侵入スル敵機ハ如何ナル手段ニテモ撃滅スベシ。

この通達が末端にまで浸透したかという、かなり怪しい。威力大なる新型爆弾と言われれば、では一トン爆弾の何倍（想像を逞しくしても何十倍）かという発想になる。ひとつの都市を一瞬で焼き尽くすというのは、想像の埒外だった。生還した四人から話を聞いた羽衣部隊の隊員たちでさえ、半信半疑という有様だった。現世にも地獄が出現し得るのだと知っているのは、この四人だけだった。

沙智の生理は、飛燕の中で始まっていた。そして、移転が完了する前に終わった。生理が明けると即刻、池澄少尉は東雲少佐に懇願した。

「当直割なんか関係なく、連日待機させてください」

「体当たりするつもりだな」

質問ではなく断定だった。

「そうです」

少佐の目をまっすぐに見つめて、池澄少尉は悪びれることなくうべなつた。

「一機一殺では間に合わないと中隊長はおっしゃいました。でも、相手が新型爆弾ならお釣りがきます」

自分の命で何万人もの同朋の命を購えるだ。敵兵十人ほども道連れにして。

「貴様はたしか新潟に……いや、なんでもない」

東雲少佐は曖昧に首を振った。あらためて、少尉の視線を正面から受け止める。

長い沈黙がつづいて。

「下村少佐の目は曇っておらなかったようだな」

ぼつんと言った。元の階級で呼んだ。

「……？」

「最初の出撃の後で、なぜワシが叱りつけたかわかるか？」

答えずに、池澄少尉は中隊長の言葉を待った。

「これを読んでみろ」

抽斗から封書を取り出して、机に置いた。

『海軍機喪失ノ顛末書』

深山のことだ。

「失礼します」

封筒を手にして便箋を引き出した。事故にいたる経過と原因分析が硬い文体で簡潔に記されていた。

最後の一枚を読み始めて――池澄少尉の手がかすかに震えた。

池澄少尉ハ、空中感覺抜群操縦射撃トモ満足スベキ域ニ達スルモ、一事ニ専念シテ他ヲ忘レルコト無キニシモアラズ。之度ノ空中接触ハ、ソノ性格ヲ把握シアルモ避退距離ノ注意喚起ヲ誤テリ本官ニ帰スルモノデアリマス。実戦ニ於ヒテハ之勇猛果敢ナル突撃精神ニテ必ズヤ敵機ヲ撃滅セシムルコト、本官ノ職ヲ賭シテ信ズルモノデアリマス。池澄少尉ヘノ処分ニハ御猶予ヲ賜ハリ引続キ戦闘機操縦者トシテ遇セラレンコトヲ上申スル次第デアリマス。

「それなのに、敵の砲火に怯えて逃げ出すな

どなんたる醜態だと、貴様よりは下村大尉に失望しておったのだ。しかし、ワシのほうが間違っておったようだ」

池澄少尉が読み終わるのを待って、東雲少佐が声をかけた。机の向こうで立ち上がる。

「池澄少尉に連日の邀撃任務を命じる。必死必勝の信念のもと、新型爆弾を阻止せよ」

「はいッ！」

返事をしたあとも直立不動の姿勢を崩さず。沙智は泣きそうになるのを必死でこらえていた。

「……とは、いうものの」

急にくだけた調子で、椅子に戻りながら少佐が言葉を継ぎ足す。

「三日ほどは英気を養え」

「はい……？」

「敵の出撃基地がテニアンだということは、判明しておる。司偵の報告によれば、昨日から大時化だそうだ。雲の広がりから見て、数日はつづく。敵さんもお天道様には勝てんわ

な」

少佐は封筒を抽斗に戻し、それまで目を通していた書類を取り上げた。話はすんだということだ。

「池澄少尉、退出します。ありがとうございますかったですっ！」

びしっと敬礼して踵を返す池澄少尉。

（やってやる……今度こそ墜としてやる。和子お姉さん、早苗姉さん、見てて！）

新型爆弾の劫火にも負けぬ炎を滾らせて、池澄少尉は執務室を後にした。

外に出ると、やたらと兵隊が駆けまわっていた。ここはもともと防空戦隊の基地で、羽衣部隊はその一画に間借りした形になっている。戦隊は三個中隊で定数三十六機、予備機を合わせると五十機ちかい大所帯である。といっても、武装の貧弱な一式戦（隼）が主力で、それよりはましな二式単戦（鍾馗）が少々という二線級の部隊だ。新米操縦者の訓練用に九七戦まである。それはともかくとして、

飛行機が多ければそれだけ兵隊の数も多い。

すれ違う兵隊たちは、いったん立ち止まって敬礼をする。階級が上の池澄少尉は歩きながら軽く答礼するだけだが、こちらが上級者に対するときと同じように規律正しく敬礼をしなければならない——と、あらためて言われたわけでもないが、どうせ女だからとあなどられたくなかった。彼女ひとりではなく、羽衣部隊の名誉にかかわる問題だった。

この基地に落ち着いて一日しか経たないというのに、彼女たちは羨望と嫉妬が縋い交ぜになった目で見られていることを敏感に感じていた。新鋭機を駆って超重爆を撃墜する女丈夫と畏怖する半面で、俺たちだって三式戦を配備されれば女なんかに負けるはずがないと内心では思っている。

——急造の男子禁制区画（つまり隊舎）に戻って。沙智は、だんだん不安になってきた。いかにして中隊長を説得するか、そればかりを考えていたのに。拍子抜けするほどあっさ

りと認められて。では、絶対確実にぶつけることができるだろうかと思ひ始めたのだ。

敵機動部隊に対して陸海軍とも特別攻撃を繰り返している。女性部隊ということで他部隊との交流はほとんどなかったが、それでも風の噂は伝わってくる。熾烈な対空砲火に虚しく散るのはどうにもならないとしても、目標をはずして海面に突っ込む機も少なからずあるという。あんなに大きくて静止しているも同然の的を外すのだから、時速五百キロで三次元の空間を飛んでいる（艦船に比べれば）ずっと小さな相手にぶつけるのは、実は難しいのではないか。

あれこれ考えているうちに日が傾いた。時計を見ると、入浴時間が終わろうとしていた。もう三日も身体を洗っていない。今日は、どうしても入浴したかった。沙智は略装に着替えて風呂へ走った。

本格的な銭湯ほどもある浴場は、すでに空っぽだった。大急ぎで髪と身体を洗って、ち

やぼんと湯船に浸かって、あわただしく外へ出ると、三人の将校が立ち話をしていた。

「お待たせして申し訳ありませんッ」

無帽だったので、きっちり四十五度に上体を倒した。

「なに、ほんの数分だ。かまわんよ」

主計部の広瀬大尉が鷹揚にうなずいた。

「買い物と風呂が長いのは、女の習性だしな」

と、これはまだ名前を覚えていない若い中尉。女だてらに戦闘機になんか乗るんじゃないと、顔に書いてある。

「失礼します」

沙智は足早に立ち去った。

どっちが飛燕に乗る資格があるか、酸素無しで八千メートルまで上がってみろと言ってやりたい。けれど、飛燕対飛燕どころか、あっちが隼でも、格闘戦で勝ち目はない。自分たちは高々度での超重爆が専門なのだ。

(それなのに……)

自分は、まだ超重爆を一機も墜としていな

い。ほんとうに体当たりできるのだろうか。  
想念は、どうしてもそこへ向かう。

ひとりで悩んでいても、どうにもならない。  
教官に教えてもらおう。至極当然の結論にたどりついたのは、夜になってからだった。

「貴様は、どうすれば良いと思うか？」

若い(といっても沙智より四つも年上だが)従兵に淹れさせた珈琲をかき混ぜながら、逆に下村大尉が質問してきた。

下村大尉は部屋を訪れた客には必ず珈琲をふるまう。沙智が珈琲を飲まされるのは、これが二回目だった。砂糖と牛乳をたっぷりいれても、舌の先にえぐっぽい苦味が残る飲み物は、どうしても好きになれなかった。

「照準を修正しながら撃ちっぱなしで突っこみます。尾翼の破壊を見届けるまで避退操作をしません」

小机を挟んで座った下村大尉の顔は見ずに、珈琲の真っ黒な表面に視線を落として答える

沙智。

「それでいい。射撃をはずさなければ、最後には的にぶち当たる」

「そうは思うんですけど……」

艦船を狙った特別攻撃がしばしば失敗するので自信がなくなると、沙智は打ち明けた。

「だいいちに腕が違う。貴様の腕なら、冷静にいけば必ず成功する」

特別攻撃隊員の多くは飛行時間が百時間にも満たないのだと、下村大尉は内幕を暴露した。平時なら赤トンボに乗っている搭乗員が、ろくに転換訓練も受けずにたった一度の実戦に駆り出されるのだ。沙智も相当な速成教育を受けたが、飛燕に初めて乗ったのは百五十時間が過ぎてからだ。

そのほかにも、失敗につながる要因がいくつかある。上空から突入するので、どうしても過足におちいりやすい。舵が重くなって微調整が利かなくなる。逆に低空からいくと、対空砲火にさらされる時間が長くなって撃墜

される。

「もっとも、一番の原因は敵の戦闘機だがな」

新鋭戦闘機は本土決戦にそなえて温存し、特別攻撃に使われるのは旧式機が多い。九七戦などまじなほうで、最近では赤トンボまで使われている。それを未熟な操縦者が飛ばして、しかも重たい爆弾まで抱えている。敵戦闘機に食われずに目標まで辿り着くだけでも天佑神助が必要だった。

特別攻撃隊が失敗する原因はひとつも池澄少尉には当てはまらないのだと、下村大尉が力強く励ましてくれる。

「気負いすぎるな。ふだんの訓練どおりにやれ。通常の攻撃より降下角度を深くすれば、過速で舵が効かなくなる。体当たりを意識して現在位置に追従すれば、敵の旋回機銃を固定機銃にさせてしまう。それから――無駄死にはするなよ。尾翼を破壊したときは、必ず避退操作をしろ。胴体さえぶつけなければ生還の可能性はある」

「はいッ、わかりました！」とは、言わなかった。

なんとなく去りがたい思いで、珈琲に牛乳と貴重品の砂糖をいれてかき混ぜる。ちょっと口をつけて、また小机にもどす。

「どうした？ まだ得心がいかんか？」

「そうではありません。ただ……」

沙智の心の中で、ふたつの想いが絡む。ずっと前から心の底にわだかまっていた、できるだけ考えないようにしてきた、女としてのこだわり。今朝見せられた上申書で知った下村大尉の本心——それは、沙智個人をかばってくれたのではなく、ひとりでも多くの搭乗員を確保したいというだけのものかもしれないけれど。

けれど、あの屈辱的な制裁で、沙智は「じゅうぶんに罰せられた」と思ったものだった。汚名にまみれて、つぎは雪辱だと心を切り替えることができた。そして能崎中尉。お姉さんの死には、どれだけ厳罰を与えられても足

りない。軍法会議で中途半端な刑を言い渡されていたら、自裁していたかもしれない。それを、あんなふうに軽く扱われて……一転して、五機は墜とせだなんて。死ぬに死ねなくなった。

お釈迦様の掌の中の孫悟空みたいに、心を弄ばれていた。でも、それは——それだけ、下村少佐が沙智個人を深く理解していたからこそ、できたことだったのかもしれない。

「ご存知でしょうけれど……」

沙智は言いよどむ。

（言っちゃだめ……でも……）

一瞬の葛藤。

「わたし、おぼこなんです。男の人を知らないまま散ってしまいたくはないんです」

はしたない言葉を口にしてしまうと、大胆になれた。立って小机を回りこんで。部屋の隅に従兵が控えているのもかまわず、下村大尉の膝に身を投げ出した。

「女の悦びを教えてください……教官殿！」

ボタンと背後で小さな音。従兵が気を利かせて場をはずしたのだろう。しかし下村大尉は強い力で沙智を押し戻した。

「新型爆弾が何発あるか、俺にはわからん」  
場違いなことを言い出す。

「阻止するには空中特攻しかあるまいと、俺も思っている」

下村少佐は立ち上がって、沙智の目を覗きこんだ。

「その娘たちの想いをすべて俺が受け止めろというのか？」

沙智は、はっとなった。自分ひとりの死で片付く問題ではなかった。

「でも、能崎中尉は男の人と……あの、その……満足していたと思います。末岡中尉だって……小島中尉も川辺少尉も……」

自分でもなにを言っているのか、わからなくなってきた。

「大田少尉は？」

下村大尉は、二期生で最初に戦死した娘の

名をあげた。彼女は……間違いなく処女だった。

「俺の胸に思い出を刻んでくれるな。生き残るかもしれない男を探せ」

いずれは自分も特攻に出る。そう言っていたのだった。下村大尉は、不意に姿勢を正した。

「靖国で会おう、池澄少尉」

半年のあいだに叩き込まれた習性で、沙智も背筋を伸ばしていた。

「はいッ、大尉殿！」

敬礼。回れ右して退出する。それでも扉の前で。

「珈琲、おいしかったです」

部屋を出たとたんに涙が噴き出した。

いいようにあしらわれてしまった。そんな悔しさが残った。そして、それ以上に。思わず口走った言葉は本音だったと、沙智は痛感していた。

女として生まれて。子供も作らずに逝って

しまうのは本意ではない。けれど、自分の死で救われるだろう数多くの赤子たち。それを自分の子の生まれ変わりだと思えば……無理にでも思えば、すこしは慰めにもなる。

けれど。女の悦び。組み敷かれて、秘所に男性の生殖器官を突き立てられるという恥ずかしくも浅ましい野蛮な行為がもたらしてくれる（と、経験者から聞かされてきた）それは。和子お姉さんとの肉の戯れの彼方に垣間見たようにも思うけれど、決定的に違うような気もしていた。それだけが心残りだったのに、こうなっては確かめようも……いや、ないことはない。基地には何百人もの男がいる。

しかし——と、沙智は思いなおした。さっきの中尉みたいに、内心では女を見下しているやつになんか、生涯一度の大切な瞬間を踏みにじられたくない。それに……男は自分の欲望を優先するという。最初の何回かは痛いだけだとも。まったく経験のない沙智を気づかって、ただ一度の逢瀬で法悦境とまではい

わないけれど、せめてそのとぼぐちくらいは垣間見せてくれるような男なんて、はたして世の中にいるのだろうか。まさか聞いてまわるわけにもいかないし、そんな時間もない。

もし、そんな男が存在するとすれば。その男は性の技に熟達していると同時に、女心の機微にも通じているだろう。軍人とは真逆の存在だ。そこまで考えて、途方もない考えが頭に浮かんだ。

(……軍隊とは何もかも反対の場所！)

沙智は隊舎の手前で引き返して、通信室へ足を向けた。能崎中尉のお気に入りだった迫田一等兵は通信室にいなかったが、当直の兵が呼び出してくれた。

事故だったとはいえ、情を交わした女を殺した相手の突拍子もない頼みを彼がどういう心境で引き受けたかは、沙智にはわからない。けれど、頼むとしたらこの人をおいて他にないと――なぜか、沙智は思い込んでいたのだった。

## 6. 処女登楼

翌日の午後。池澄少尉は外泊を申請した。申請書に記された連絡先を見て、東雲少佐は目玉を引ン剥いた。

「下関新地の『福楼』だと……？　どういう所か、知っておるんだらうな？」

「知っています。遊郭、男が商売女と遊ぶ宿です」

ふう……と、溜息をつく少佐。池澄少尉を見て、申請書に目を落として、また顔を上げて。

「英気を養えとは言ったが。これは……その……そうなのだな？」

なにがなんだかサッパリわからんといった表情の少佐。

「思い残すことなく出撃するには、どうしても必要なのです」

少佐は眉間に縦皺を寄せて申請書を読み直

して、あきらめたような表情で公印を捺した。いくら相手が小娘でも、陸軍将校たる者の私的な事情にまで踏み入るべきではないとでも、観念したのかもしれない。

「ありがとうございます。即時発進待機には間に合うように帰隊します」

「それには及ばん。今日もテニアンは暴風がつづいておる。明日の攻撃は無い」

池澄少尉は第二種軍装（夏服）に身を固めて『福楼』を訪れた。三つ編みは後ろで丸めて帽子に入れているので、ちょっと見には小柄な美青年だった。

「予約をしている池澄だが」

店の前で客引きというよりは見張りをしている若い衆に、腹の底に力をいれた低い声で話しかけた。

「へい。お待ちしておりました。池澄陸軍少尉殿ですね」

若い衆は腰を低くして、池澄少尉を中へ案

内した。

迫田一等兵には、評判が良くて融通の利く店を探してくれるようにだけ頼んだのだが。店の構えは群を抜いている。おそらく将官級を相手にしている高級遊郭だろう。だからといって、ペエペエの少尉でも粗略に扱わないところが、さすがだった。

「敵娼あいかたのご指名はないとのことでしたが、どのような娘をお好みでしょうか？」

遣り手婆が訝しげな目で沙智を値踏みしながら、それでも丁寧に訊ねる。

「いや、女に用はない」

沙智は帽子を脱いだ。ぱさっと三つ編みが肩に垂れる。遣り手婆の目玉も東雲少佐に負けないくらい飛び出た。

「こういった店には、新米の女に……」

言いよどんだが。明日もテニアンが暴風だとはかぎらない。いや、店が二度と予約を受けてくれないだろう。

「その、なんだな……色々と教える役目の男

がいると聞いている。そういう男と一夜を過ごしてみたいと思うのだが？」

「ひええ……？ いえ、あの……はい、さ、左様で……？」

しどろもどろの遣り手婆。

「そんなところで立ち話は失礼だ。揚がっていただきなさい」

帳場の奥から声がかかって。沙智はその場に居合わせた全員の奇異の視線を一身に浴びながら二階に案内された。一番奥の、広い座敷だった。五分ほど待たされて。帳場から声をかけた男が挨拶に来た。

「ようこそのお運びを。ええ……男衆とのお遊びをお望みとのこと？」

「遊びでは、ない」

床の間を背に正座して重々しく言ったつもりだが、声がうわずっていた。

「敵の爆撃機を相手に、いつ散華するかも知れぬ身だ。靖国へ行く前に、女の悦びというものを知っておきたい」

何度も頭の中で繰り返してきた言葉を口にする。

男がハッとしたりのように沙智を一瞬見つめてから、黙って頭を下げた。遊郭は、もっとも早く情報が伝わる場所のひとつだ。羽衣部隊、新型爆弾、絶対阻止命令。帳場に座るほどの男なら、それらが帰結するところを見誤るはずもない。

「今しばらくのお待ちを願います」

沙智に背を向けることなくひざまずいた姿勢のまま後じさって、男が出て行った。

しばらくして。沙智よりも若い、せいぜい十五、六くらいの妓がふたり、酒肴を運んできた。

「あの……おひとつ、いかがでしょうか？」

妓のひとりが、遠慮がちに銚子を差し出す。沙智はちょっと考えてから盃を取り上げた。まったく酒を飲んだところがないわけではない。海の冷たい季節には、仕事を終えて焚き火で身体を暖めているときに、お姉さんたちにそ

そのかされて、ちょっとすすったことくらいはある。身体はぼかぼかしてくるけれど、頭がぐらぐらするのには参った。

最初一杯をちびちびと舐めて、箸を手にした。名物だという『ふく』の刺身は、淡白だがほのかな旨みがじわっと口の中に広がっていく。鯛の吸い物が生臭く感じられるほどだった。沙智にも名前のわからない大きな二枚貝の塩焼きも気にいった。懐かしい磯の香りが濃厚な味を引き締めていた。

妓ふたりは、手持ち無沙汰に沙智の健啖ぶりを眺めている。

「そんなに食べてばかりやなくて、もう一献どうぞ」

妓はまだ廓言葉が身につけていないのか、初めての女性客に戸惑っているのか。地元の訛りをまじえた標準語で話しかけてくる。

もう一杯くらいならと箸を置いたとき。

「失礼いたします」

開いた襖の向こうに、三十歳くらいの男が

控えていた。ちょっと顎が張った顔に角刈りの頭。細い目の縁に鋭い光があった。こわもてという印象ではないが、こういう場所にふさわしい如何にもな感じの男だった。紺無地緋の着流しに、くすんだ黄色の帯が鮮やかだった。

「はいらせてもらって、良いですか？」

沙智の返事を待って立ち上がり、腰をかがめて座敷にはいってくる。すこし離れたところにいったん座って。

「この店で働いてる武志といいます。沙智さんのお相手を務めさせていただきます」

名乗ると膝を進めて、沙智の左側へ斜めに向き合う形で並んだ。

「手前どもも、こういうことは初めてなんで、不調法があったら勘弁願います」

膝行することで上下のけじめをつけたうえで、沙智の許しを得ずに並びかける。客を立てながら自分が主導権を握る、心憎い演出だった。

短い沈黙があつて。ま、おひとつと――武志が銚子を取り上げた。気詰まりになりかけていた沙智は、ほっとした思いで盃を受ける。

「ひとつ、お流れを」

両手を差し出されて、返盃という慣習があったのだと思い出した沙智。盃をわたして、注いでやった。武志がクイツとひと息に干して、盃を沙智へ返す。

「ありがとうございますやした」

受け取ったところに、また銚子を傾けられて。

「あの……わたし、お酒はあまり呑めないんです」

「さっぱりした酒です。悪酔いはしませんから」

女を酔わせてどうこうという話は聞くが、こちらから押しかけてるのだ。まさか、そういう目論見でもないだろうと、沙智は三杯目を、武志をみならってひと息に干した。

真夏だからだろうか。身体が暖くなるよ

うなことはなかったが、心が華やいでくる。

「ちよいとひとつ風呂、浴びましょう」

「お風呂を……？」

怪訝な顔で聞き返したのは、武志に手を取られて立ち上がったあとだった。

「お客人向けの風呂ってのはないんですがね。妓を銭湯へかよわせるのも、いろいろと差し障りがあるんで」

裏庭に離れて造られている内風呂へ案内された。とにかくも、こちらは俎板の上の鯉なんだからと、裸になって洗い場へおりて。

沙智のために張り換えたのだろうか。湯は澄んで、髪の毛一本浮かんでいない。それなのに、脂ぎった白粉臭さが空間に漂っていた。





「三会目、ちぢみ織るてふはなしまで――てえ、川柳を知ってやすか？」

奥の間に敷かれた布団の横に肩を並べて座って。気詰まりな沈黙が流れて。不意に武志がたずねた。沙智は首を横に振った。話が、まったく見えなかった。

「昔の遊郭じゃ、<sup>いちげん</sup>一見で肌を合わせるなんてえことはなかった」

武志が説明してくれた。最初はお見合みたいなものです。二会目が裏を返すといひましてね、さしずめ逢引でしょうか。三会目でや

っと気心が知れて、惚れて惚れられて肌を合わすって段取りでした。そこまでくると、妓のほうも打ち解けて、廓に売られる前は故郷で機織をして親を助けていたとかなんとか、身の上話まで披露したってことです。

「けど、おまえさんはそうじゃねえ」

あくまでも高嶺の花を貫いて、客に惚れさせても自分は惚れない。百年も前に生まれていれば、そんな張りのある太夫になっていただろうさと、武志は受けあった。

「……ふつうの女だったら、こんな馬鹿な真似はしない。そう言いたいのか？」

沙智は浴衣の前を搔き合わせて、硬い声で言った。

「そういうこった」

武志は、あっさりと肯定した。そして、いきなり沙智を布団の上に押し倒した。

「だからさ……おまえさんのような気の強い女を哭かせてやりたい。男なら、誰だってそう思うんだよ」

浴衣の襟をつかんで、両手でぐいと押し開いた。小ぶりの乳房が男の眼前にさらされる。

「いや……」

沙智はちいさくつぶやいた。風呂で見られたときより、ずっと恥ずかしかった。なぜだろう。不思議だった。前をはだけているかいないかの違いはあるけれど、ふたりとも浴衣姿なのに。男の手で「裸にされた」という事実が羞恥の根元にあることに、沙智は思いつけなかった。

「かわいいぜ……」

男の掌が乳房を包んだ。

「あっ……」

沙智の肩がびくっと震えた。くすぐったさは、もう感じなかった。

「わたし、小さいから……」

沙智は顔をそむけて唇を噛んだ。

「まあ、豊満とはいえねえが……きゅっと盛り上がって、柔らかいくせに弾力があって。さしずめ、掌中の珠ってところだ」

指は乳房の基底部に置いたまま、掌で乳房をじわっと揉む。

「あ……ん」





















「ふう……」

夜も更けていくらかは涼しくなったとはいえ、閉じきった小部屋。熱気がこもって、ふたりとも汗みずくだった。男は反りかえったままの逸物をぐいと抜いて、最後に小さな悲鳴をあげさせてから、沙智の身体をはなした。四つん這いのまま突っ伏して肩で息をしている沙智の背中を手拭でぬぐってやる。

「わたしのこと……淫乱女だと思ってるでしょうね」

乱れた夜具の上に座りなおしたが、男の顔をまともに見られない。思いつめていた気持ちが緩んで、娘らしい羞恥心が表に立つ。

「それでもねえですよ。男だって出征する前

「や同じことをするんだし」

「だけど……最初から、こんなにはしたなく  
乱れて……」

「冗談じゃねえやい」

武志は怒ったように言う。

「あんたは蕾でイッただけさ。穴でも感じて  
はいたようだが、まだ一合目くらいのもんだ」

女の悦びを知りたいとあって、ここへ来た  
んだろ。お客を満足させずに帰したんじゃ『福  
楼』の名がすたると、武志は力みかえった。

「あっしのここだって、まだまだやる気です  
ぜ」

男がまだ一度も射精していないことに、な  
にもかもが初体験の沙智は気づいていない。

「ですが、まあ——ひと休みしましょう。夜  
は長いんだ」

武志は立って、隣の座敷から膳を持ってき  
た。その間に沙智は脱げてしまった浴衣に袖  
を通す。

武志も浴衣を羽織ったが、股間を見せつけ

るように胡坐をかいた。どぎまぎして目をそらす沙智。銚子を差し出されて、ほっとしたように盃を手にした。すっかり爛が冷めていたが、アルコールが飛んだぶんだけ口当たりがよくなっている。たてつづけに三杯を干したところで、番茶をすすめられた。腹の中で酒が薄められて、悪酔いしなくなるのだという。同じ理屈で八寸もすすめられたが、食欲はわからない。

「ごめんなさい」

膳に箸を置いた手をつかまれて。自分から身体を投げ出すように、布団に転がった。あお向けにされて膝を男の肩にかつがれた。浴衣の裾が割れて広がって、下半身が丸出しになる。男が腰をかがめながら顔と顔とが向き合う位置までずり上がってきた。沙智は脚を大きく広げて尻を高々と上げた姿で二つ折りにされてしまった。

「だちゃかん……見んとしてえ！」

天井を向いた股間を男に見おろされて、沙

智は両手で顔を隠した。



沙智が遊郭を「女になる場所」として選んだのは正しい選択だったといえるだろう。

揺れるような風が肌に心地よかった。目を開けると、武志が団扇であおいでくれていた。裸のままだったが、夏蒲団が胸から腰までを覆っていた。

股間にかすかな違和感があった。布団を落とさないようにそっと半身を起こすと、武志が落とし紙を渡してくれた。女のことは何もかもお見通しといった感じだ。男に背を向けて、違和感のある部分をぬぐった。千代紙がかすかに赤くにじんだ。それを丹念に丸めて

屑籠へほうって。けだるい余韻に身をまかせて横になった。

女になれた。ひとしおの感慨だった。けれど、心の奥底になにかが引っ掛かっていた。子供を産んでこそ女として一人前だとは、巷間よく聞く言葉だけれど。自分には、その時間はない。特攻を決意した瞬間に、未練は棄てた。もう、思い残すことはない……はずなのだけれど。

ふうっと溜息をついて、武志と目が合った。視線をそらすのも決まりが悪くて、曖昧な笑みを向けた。

「ぶしつけなことを聞きやすが……おまえさん、月の障りが終わったところかい？」

ほんとうにぶしつけもいいところ。だけど……自分を女にした男だと思うと、怒る気にはなれない。

「やっぱりかい」

沙智の逡巡からひとり納得する武志。

「ここしばらく、おまえさんは妊娠しねえよ。

なんで、こんなことを言うかってえと……もし、それが気がかりなんだったら、心配するこたあねえ。好きな男に抱かれろや」

「な……！？」

この男はなにを言いたいのか。まるきり見当がつかなかった。

「わかるんだよ」

武志はしみじみと言った。

「おまえさん。さっきのでイクってのがわかったつもりになってるンだろ。間違っちゃいねえよ。けど、男女の機微ってのは、もっと奥が深けえんだ。身体が満足しても、心の奥底が満足してなけりゃ……仏作って魂入れずってやつさ」

武志は夏蒲団を引き剥がして沙智の裸身をあらわにした。

「実のところ、俺あ、まだ精を放っちゃいねえ。おまえン中に子種を撒いちゃいねえんだ。もし……想い人なんかいねえってんだったら、俺の精を受けてくれるかい？」

のしかかってきて、沙智の股間を深々と指でえぐる武志。彼の逸物は、いつでも沙智を貫ける態勢だった。

「いやあ……！」

反射的に身をかわした。その瞬間、沙智は武志の言葉の意味を理解していた。

「ま、そういうことさね」

武志はあっさりと身体を起こした。膳から銚子を取り上げて、一気に飲み干す。

「俺っちは、道案内さ。おまえさんの間夫にはなれねえんだよ」

やさしく沙智の布団を掛けなおして。何事もなかったかのように、また団扇で風を送る武志。

沙智は武志に背を向けて布団を胸元に引きつけた。武志が豆電球に切り替えてくれた薄明かりに光る畳を見つめて。ゆっくりと夜は更けていった。

## 7. 慕情昇天

それでも、夜明け前には眠りに落ちていたようだった。武志にゆり起こされて沙智は朝を迎えた。こんなにおいしい朝ごはんを食べたことはないと思ったほどの、なんの変哲もない梅粥を腹におさめて、沙智は『福楼』を出た。勘定書きを見たときには目を疑った。ひと晩の遊び代と聞いていた金額の半分にも満たなかった。女だてらにこんな店で遊べば、ふつうの数倍はボラれるものと覚悟していたのに。

「命に値段はつけられませんから……ま、お食事代てところですよ」

見送りに来てくれた武志の言葉に合わせて、帳場の主も深々と頭を下げた。池澄少尉は敬礼で謝意をあらわした。

朝帰りした池澄少尉を出迎えたのは掌整備長の上島曹長だった。ちょうど整備小屋から

出てきたところで、形式的に敬礼をしてから、おいでおいでと手招きをする。

沙智が近づくとまぶしそうに目を細めて顔を眺め、胸から腰まで視線を這わせて、また顔にもどる。

「ふうむ……いや、まったく。ひと晩で、こうも変わるものかね。色っぽいというか……小さな蕾が大輪の花を咲かせたというか」

それは思い込みではないだろうかと、沙智は思った。洗面のときに鏡を見ているが、とくに変わったところはなかった。

まあいいかと、曹長はつぶやいて。

「いや、お呼びしたのは別の話です。こいつを見てもらえますか」

彼が肩越しに指さしたのは飛燕だった。すこしでも軽量化するために塗装をしていない、ジュラルミンの地肌。塗装は日の丸と、主翼前縁の黄色の帯と、風貌の前の防眩色だけ。帯は敵味方識別の目印で、翼幅の半分くらいまでを塗るのだが、この飛燕は翼端まで黄色

だった。

(あれ……)

やけにのっぺらぼうだと思ったら、前縁から突き出している砲身がない。池澄少尉は飛燕に近寄って、砲身を撤去したあとに残るはずの穴もないことに気づいた。それに、黄色の帯と主翼表面との間にわずかな段差があった。

曹長が小さな木槌で帯の部分を押した。カアンというジュラルミンの甲高い音ではなく、ゴンと鈍い音がした。

「もしかして、これ……鉄なの？」

「山形鋼を鍛冶屋に持ってって、前縁の丸みに合わせてもらったんですよ」

有害な乱流が発生しないよう、縁はできるだけ薄くしたという。

「だいぶん薄くなったが、気休め程度にはなるかと思ひましてね。ホ五（二十ミリ機関砲）は重たいから、差し引きで軽くなったし」

整備小屋の隅で仮眠をとっている兵もいる。

気休めのために徹夜してくれたのだ。

「試験飛行してみますか？」

「もちろん。すぐ準備してきます！」

池澄少尉は駆け足で隊舎へ戻った。鼻の奥がきな臭かった。

——文句なしの出来栄えだった。山形鋼を直接取りつけたときとは違って、操縦性は良好だった。上昇率にいたっては、軽くなった分だけ向上していた。主翼がどれだけ頑丈になったかは、実戦で試してみるしかないけれど。敵機の尾翼をスパッと切り裂く光景を脳裏に描いて、池澄少尉は武者震いするのだった。

一時間ほども特製飛燕を駆って手のうちにおさめて。残りの時間を池澄少尉は、ふだんの非番の日と同じように過ごした。つぎの出击で死ぬのだとは、考えなかった。なんとしでも——肉迫して機関砲で垂直尾翼を吹き飛ばすか、主翼でぶった切るか、真正面から激

突するか——絶対に、新型爆弾を阻止するだけだ。

だから、池隅少尉はことさらに身辺整理をしたり、両親に手紙を書いたりはしなかった。もしも命を落としたときに汚れた下着とかが残っていたら恥ずかしいと、洗濯だけはすべて片づけた（宿舎付の従兵はいるけれど、男に洗濯を言いつけるほどの猛者は、一期生の中にもいない）。

入浴時間は目一杯に使った。今も身体に刻まれているように感じる武志との名残を洗い流すのに、未練は感じなかった。

先輩も同期生も、あれこれと沙智に問いかける。沙智はいちおう真面目に、しかし核心は曖昧にぼかして受け答えする。

「沙智、あんた思いきったことをしたねえ」

そうかな。どれだけあるかわからない命だもの。悔いを残さないようにしなくちゃ。

「遊郭の男って、やっぱり上手なの？」

んふふ……痛くなかったし。あんなの、初

めて！

「見たよ、あの飛燕。ほんとに体当たりするつもり？」

そのときになってみないとわかりません。でも、新型爆弾は絶対に落とさせません！！

洗濯物を取りこんで。夕食は軽くすませて。寝台に寝そべって身体を休めて。

就寝喇叭が鳴った直後。

沙智は起き上がった。隊舎を出て、百メートルほどはなれた一般将校の宿舎へ向かった。その足取りには、迷いもためらいも、恥じらいすらもなかった。風呂場で言った言葉に嘘はない。悔いは残したくなかった。武志に教えられた。最後は心なのだ。

ノックもせずに、沙智は戸を開けた。

「誰だ？」

穏やかな誰何の声には答えず、沙智は寝台の横に立って男を見おろした。

「わたし、男の人と交わりました。だから、もう……あなたの胸に思い出を刻んでもらう

資格はないです」

沙智は略服を脱いだ。下にはなににも着けていない。軍袴も床に落として全裸になった。

「気軽に遊んでください」

沙智が寝台の縁に腰を落とすのと入れ替わりに、下村大尉が跳ね起きて床に立った。すこしでも涼を求めてか、下帯一本の裸体だった。

(へえ……?)

軍隊標準の越中褌ではなく、六尺を締めていた。そういったことに気づくだけの余裕が、いまの沙智にはあった。

「池澄少尉、馬鹿な真似はするな」

「明日になったら少尉にもどります。でも、今は……」

沙智も立ち上がって、ぶつかるような勢いで大尉に抱きついた。

「沙智って呼んでください。それに……もう、馬鹿な真似はしちゃってます。これ以上、女に恥をかかせないでください」

海女だからといって、とくに力が強いわけではない。だのに、やすやすと大尉を押し倒してしまった。







そうか。武志さんが言っていたのは、これ  
だったのか。下村大尉の腕に頭を乗せて、沙

智はしみじみと思った。

どこまで高く昇ったかといえば、武志さんがエベレストなら下村大尉はせいぜいが日本アルプスだった。慣れたせいもあるだろうけれど、今夜は果てしなく昇り詰める恐怖がなかった。どこまでも知った道だった。けれど――昨夜は感じていた一抹の虚脱が、今夜はなかった。身体の芯まで男に満たされたという充足感があった。

幸せとはこういう形をしているのだと思った。この先、何十年と生きたとしても、この一瞬に匹敵する時は二度と巡ってこないかもしれない。

未練を振り捨てて、沙智はパッと身体を起こした。

「わたし、部屋へ戻ります」

床に脱ぎ散らかした略服を拾いかけて。それは最後の未練だったろうか。椅子に置かれた白い布に手を伸ばした。

「下着を忘れてきちゃった。これ、貸してく

ださいね」

いたずらっぽく言って、呆気にとられている下村大尉の目の前で六尺禪を締めにかかる。「待て。それは汚れている。新しいのを貸してやるから……」

それを無視して、沙智は手早く禪を締めて略服を身につけた。

「おやすみなさい」

沙智は無邪気な笑みを置き土産にして、男に背を向けた。

## 8. 天女特攻

夜明けと同時に、自然と目が覚めた。飛行服に着替えるとき、ためらうことなく下村大尉の六尺を締めた。細腰には布が余るので、もうひと巻きして前袋を吊り上げるように横で結んだ。ぎゅっと股間が締めつけられて、沙智はひとり顔を赤くした。

待機所には、中隊付の泉中尉が先に来ていた。

「今日は来ますよ」

まぶしそうに池澄少尉を見ながら、断言した。太平洋に散在する小島に置かれた防空監視所の幾つかが夜明け前に大型機の爆音を聞いたという。位置や時刻から推定して、同一機ではないようだった。

「偵察機でしょう。新潟がやられたときも、2時間前に単機で飛来したそうですから」

どちらが上官かわからない、ていねいな言

葉づかいだった。上島曹長が指摘したように、沙智を成熟した女性として意識しているのか、それとも、数時間後には軍神になろうとしている池澄少尉への敬意なのか。

池澄少尉は、ごく自然に泉中尉の態度を受け入れていた。新型爆弾が、まったく新しい理屈にもとづく原子爆弾だということを、すでに知らされている。その威力は火薬に換算して一万トンを超えとか。そんな物を二度と同朋の頭上に落とされてたまるものか。頭の中には、そのことしかない。

やがて、第二報がはいった。大型機少数が編隊を組んで北上中。いよいよ、第〇七五独立飛行中隊の正念場だった。

末岡中尉の率いる小隊が先に離陸した。池澄少尉はいったん滑走路の端に止まった。開け放った風防の中から見送りの一同に敬礼をして、最後に下村大尉へ視線をもどした。訣別の一瞬。池澄少尉は一切を断ち切るように、右手を強く下へおろした。方向舵ペダルのつ

ま先から力を抜いてブレーキを緩め、ガスレバーを押し込む。飛燕はスルスルと滑走を始め、矢のように加速して大地を蹴った。

池澄少尉は先行する四機に追いつき、二番機の斜め後ろへ占位して逆V字形の編隊を組んだ。どうかすると先へ先へ上へ上へ行こうとする機体をなだめて、じゅうぶんな余力を残して飛ぶ。昨日よりも操舵応答が滑らかだった。前縁を見ると、黄色の帯の後ろに白い縁取りがあった。前縁を補強した鉄の縁にあったわずかな段差がパテで成形してあった。

大分を航過したとき、転針の指令を受信した。鹿児島に設置された電探が敵を発見した。敵機の針路は北西。そのまま進めば長崎より西へ出る。欺瞞行動だ。いたずらに敵を追うのではなく、目標の手前で待ち受ける作戦に切り替えられた。

五機は針路を二六〇にとって、さらに高度を上げていった。熊本の手前で新しい情報はいった。敵重爆少数機の編隊が対馬海峡を

東進中。迎撃に上がった大村の海軍航空隊は敵の護衛戦闘機に待ち伏せされて全滅した。

（戦闘機……！）

鹿児島島の電探が見落としたのか、それとも敵は沖縄あたりから飛来して合流したのか。対戦闘機空戦のできない羽衣部隊にとっては致命的な状況だった。

『ワレ羽衣。索敵を続行する』

末岡中尉の落ち着いた声。戦闘機が護衛についていても、相手にしなければいいだけの話だ。敵がこちらを相手にするときは……それは、そのときのこと！

池澄少尉は彼我の位置を航空地図に書き込んだ。長崎までなら、こちらのほうが早く到達できる。しかし、欺瞞行動にしても迂回経路が離れすぎていないだろうか。敵の目標が小倉か広島だとすると、長崎は逆方向だ。数万人の命を丁半博打には賭けられない。酸素不足の頭で考えるうちにも、貴重な時間が費やされていく。池澄少尉は無線機を送話にし

た。

『羽衣五番、北上する。第一区隊は長崎へ向かってください。第二区隊はワレにつづけ』

少ない戦力を二つに分けて大敵に向かう愚かしさは、兵法を学んだことのない者でも容易に理解できる。それでも、ほかに選択肢はない。池澄少尉は、そう信じた。

池澄少尉は右に旋回して針路を〇三〇にとった。敵は左側にいるはずだ。一万メートルで水平飛行にうつって、海岸線の手前で針路〇七〇。

第一区隊から無線電話の通報。長崎上空に敵影無し。左側を六、右側を一の割合で見張りながら、東へ飛ぶ。十のうち三は、上下と真後ろだ。

左後方に一瞬の煌き。池澄少尉はその方角をぼんやりと眺めた。注視するより、そのほうがよく見える。茫漠とした視界の一面に淡い銀色の影が見えた。

『敵発見！ 八時の方向、同高度』

通報を終えると、池澄少尉はガスレバーを公称出力の位置まで押した進めた。吸気圧力計の針が跳ね上がった。速度はそのままに、飛燕がじりじりと一万メートルから上昇していく。公称出力での運転は三十分までと定められている。それを超えると発動機が焼けつく。高々度で吸気圧力が下がっているから、もっと長時間の運転もできるかもしれないが、冷却器の効き具合も落ちているので——どうなるかわからない。

三番機と四番機も公称出力を使っているようだが、池澄少尉機のほうが軽いので、だんだん高度差が広がっていく。

すでに海の上だった。池澄少尉は敵編隊の上空へ、じりじりと間合いを詰めていった。淡い影が串団子の形から四発飛行機の姿に変わっていく。

(あと五分で接敵……)

池澄少尉は機首を下げた。稼いだ高度を速度に変換して敵の死角に回りこもうとした、

そのとき。左の主翼をかすめて真っ赤な筋が走りぬけた。

（撃たれている！）

とっさに操縦桿を右へ倒した。真っ赤な筋が左下へいったん遠ざかり、またゆっくりと近づいてくる。池上少尉は横転をつづけながら背後を振り返った。前縁を赤く光らせて、敵機が追いつがっていた。

ぐるうっと回る水平線に舵を当てて水平にもどし、その下へ潜りこんだ。解除釦を握りながらガスレバーを前いっぱいへ突き当てる。発動機が轟然と吠えた。地上では一分しか許されない離昇出力。機体をビリビリ震わせながら急降下する飛燕。敵を振り切った。速度計は九百を超えて激しく揺れている。

ガスレバーをもどしても速度は落ちない。じわっと操縦桿を引いただけで、身体が操縦席に押しつけられる。ペしゃんこになりながら引き起こして、ふたたび公称出力まで吸気圧を上げる。敵から逃げていては使命を果た

せない。

格闘戦なんかできなくても問題はない。敵に撃墜される前にB 2 9を撃墜できればいいのだ。それが困難なことは、池澄少尉にもわかっている。それでも、どうしても……。

目の前に敵爆撃機の編隊が見えていた。四機のうち一機だけが、あきらかにヨタヨタ飛んでいる。超重量物を搭載している証拠だ。

(あいつだ……)

そちらへ機首を転じたが、急降下で得た速度をすべて高度に変換してしまったので、最後の距離を詰められない。

敵が追ってきていないだろうか。池澄少尉は身体をひねって、風防の視界が許すかぎりの真後ろを見た。いた！ 二機が横並びで迫っていた。相手のほうが速い。こちらがB 2 9に取りつく前に追いつかれる。

右のやつが真後ろに食い込んできた。ここで大きな回避操作をすれば、もう追いつけなくなる。池澄少尉はB 2 9に向かって飛びな

がら、右のペダルをそっと踏んだ。B 2 9 は左後方へ流れる。

敵機の前縁が赤く輝いた。胴体すれすれまで迫る灼熱の筋。が、ついつと右へそれる。方向舵で機首を右へ振っても、機体は慣性で元の進路を飛びつづけようとする。敵が機首の向きで未来位置を予測して弾丸を撃ち込んできて、自分は左へ流れている。

敵が横滑りを見破って照準を修正してくれば、それまでだ。そうでなくても、空気抵抗が増えて速度が落ちるので間合いを詰められてしまう。見越し修正が不要な距離まで接近されれば、もうかわせない。すくなくとも池澄少尉の技量では。

はたして。火箭がじりじりと近づいてきた。右に横転を打てば、射線に飛び込む。左に切り返せば、敵戦闘機に対して静止する瞬間が生じる。

(くそう……！)

B 2 9 を睨みつけながら、池澄少尉はつい

に観念せざるをえなかった。姉の顔が和子の顔が武志の顔が、そして下村大尉の顔が脳裏をかすめる。

次の瞬間。パタッと赤い筋が消滅した。そして、真っ赤な塊が飛燕を追い抜いていった。くすんだ緑の機体を巻いた白い帯に鮮やかな日の丸。尾部を赤く塗った――四式戦だった。

『間に合ったな』

下村大尉の声が受話器に響いた。

『大尉殿…… どうして！？』

送話釦をはなした瞬間、耳元で怒鳴り声。

『……せ！ 右ッ！』

右に横転を打った直後、下腹を火箭が通りすぎた。

『戦闘機は引き受けたぞ』

東雲少佐の声だった。

なぜふたりがここにいるのか、さっぱりわからない。けれど、護ってもらっているという安心感。すこしだけ平常心がよみがえった。

きょろきょろと上下左右を見まわし、乗機

も上下左右に揺すって死角を覗く。十機以上の敵戦闘機が飛び交っていることに初めて気づいた。飛燕によく似た機影。P 5 1だ。そのうちの一機は飛燕そっくり……ではなく、飛燕だった。P 5 1を下から突き上げて、機首の二十ミリで分解させた。

（二門だけ……？）

乙女仕様の飛燕に男が乗るために、翼内機関砲をはずして軽くしたのだろう。たしか、基地には即時飛行可能な予備機が一機だけあった。その気になれば、十五分とかからずに機関砲を取り外せる。

『敵の目標は広島だ。まだ時間はある。高度を取れ』

小倉と思われる市街が眼下に見えていた。

（ああ、そうか……）

池澄少尉は納得した。ここは山口に近い。敵に戦闘機が随伴していると知って、護衛に駆けつけてくれたのだ。手ごわい相手が出現したと、敵も理解したようだ。敵戦闘機は二

機にかかりつきりになっている。

東雲少佐の三式戦は一万メートルの高々度で、敵に囲まれながらも互角に戦っている。しかし四式戦は苦戦していた。無理な旋回をするたびに、ガクンガタンと高度を失っている。下村大尉の身が心配だったが、いまは私情に流されているときではない。

池澄少尉は公称出力を維持して高度を上げていった。

B 2 9 がのたのたと旋回して、針路を広島の方角へ向けた。どうあっても原子爆弾を落とすつもりのようなのだ。

しかし、この旋回は天佑神助といえた。敵編隊の内懐へ食い込む形になったのだ。緩降下で速度をつけて、優速で右後方に占位した。見おろす超重爆は、海とも空ともつかない青い空間に浮かんでいる。

池上少尉は、ちらっと後方を振り返った。戦闘機同士の空中戦は、五キロほど後方でまだ続いていた。七千メートルのあたりでは、

四式戦が敵を追っている。

(生きて還ってください)

断じて私情ではない。下村大尉は、若い女性に空戦を教えられる貴重な人材だ。

四式戦のはるか下には紺色の海が広がっていた。故郷と同じ色の海が。

(晴れていてよかった)

ふっと思う。深山との空中衝突、能崎中尉機との接触、新潟の壊滅。その光景のすべてに雲があった。雲は不吉の象徴のように思えた。

頭をもたげた感傷は、別の想念を呼び起こす。

ほんとうに、自分のしようとしていることに意義はあるのだろうか。たとえ首尾よく原子爆弾を阻止できたとしても。物量で押してくる敵だ。三発目、四発目とつぎ込んでくるに決まっている。

(それは違う！)

沙智は自分を叱った。人はいずれ死ぬと知

りながら、今日を生きている。何万人もの今日を守ることに意義の無いはずがない。明日は……別の誰かが、きっと守る。

「とーと、おかか、いま帰るけん」

声に出してつぶやいて。まるで海に浮かんでいるかのような超重爆に向かって、沙智は翼を傾けた。

[終]

## 参考文献

“戦闘機「飛燕」技術開発の戦い” 碓義郎（光人社NF文庫）  
“吉原御免状” 隆慶一郎（新潮社文庫）245 頁から 246 頁を引用

空戦に関する描写は、主として坂井三郎海軍中尉の各著書を参考にしています。

離陸の手順に関する描写は、服部省吾氏（元自衛官に対しては、最終階級で呼ばない慣習があります）の各著書を参考にした部分があります。

## 参照WEBサイト

[http://www.geocities.co.jp/une\\_genzaburo/Translator.htm](http://www.geocities.co.jp/une_genzaburo/Translator.htm)

<http://www7.plala.or.jp/gunma/gunmaben.htm>

<http://gunsight.jp/c/Type3fighter-cockpit-3D.htm>

## 後書き

今回は、ぐっとソフトです。本格的架空戦記です。純愛小説です。

どこがR18なのか筆者にもわかりません。石は投げないでください。

架空戦記ですが新兵器など出さず、リアリティを追求したつもりです。

けっして特攻を美化するつもりはありませんし、少数者の（自発的）犠牲で多数を生かすという考え方にも疑問は残りますが、お話の都合上、右翼のお涙ちょうだいロマンチズムになってしまいました。

次発は装填済です。すぐにでも発射予定です。

1作目がドイツで戦車、2作目は日本で戦闘機、当然3作目は……と思わせておいて。まあ、海が舞台ではありますが。とにかく、1作目なんか目じゃなくくらいにハードです。鬼畜です。長編です。乞うご期待……て、宣伝ばかりしてどうする!?

では、お約束の呪文で締めくくります。

この作品はフィクションです。実在する（した）人物・団体・歴史・年齢とは関係ありません。

1：本文中では年号に昭和を使っています。誤記ではありません。（わざわざ、招く平和と入力してバックスペースしています!）

2：本文の手順どおりにSEXをしても、処女を逝かせることができるとは限りません。

2017年9月

著 者：濠門長恭

イラスト：藤間慎三

発 行：SMX工房